

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋

PROJECT 2017

ヒロシマ



Project Report

2017

報告書

主催

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

共催

中東のための ヨハネ・パウロⅡ世財団

Organizer :

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

Co-organizer :

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

主催

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

共催

中東のための ヨハネ・パウロ II 世財団

Organizer :

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND

Co-organizer :

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST

ISRAEL — PALESTINE — JAPAN

平和の架け橋

PROJECT 2017

ヒロシマ

Project Report

2017

報告書

広島平和記念公園内の『原爆の子 (サダコ) の像』
The Children's Peace Monument (Statue of SADAKO)
in the Hiroshima Peace Memorial Park



広島女学院大学のチャペルでの「平和祈念礼拝」のあとの集合写真
Group photo after the "Prayer Service for Peace" in the Chapel of Hiroshima Jogakuin University



目次 Contents

謝辞	Gratitudes	4
平和のメッセージ	Messages of Peace	6
1	プロジェクトの主旨と概要	12
	Purpose and Outline of the Project	13
2	総括	14
	Summary of the Project	18
3	準備	Preparations
	1. 準備(日本とイスラエルパレスチナで)	21
	Preparations (in Japan & in Israel-Palestine)	
	2. 日本人参加者の事前研修	23
	Preparatory Seminars for Japanese participants	
	3. イスラエル・パレスチナでの事前研修	20
	Preparatory Seminars for Israelis & Palestinians	
	4. チャリティーイベント	25
	Charity events	
4	プロジェクトの経過	27
	Daily Reports of the Project	30
5	収支決算	32
	Balance Sheet	
6	参加者の声	Feedback from the Participants
	青年参加者の声	34
	Voices of the Young Participants	
	スタッフの声	51
	Voices of the Staff	
	広島・長野からの声	55
	Voice from Hiroshima and Nagano	
7	名簿	61
	Lists of names	



謝 辞

主催者 認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 と
共催者 NGO ヨハネ・パウロⅡ世財団(エルサレム)は、
イスラエル・パレスチナ・日本の若者がつくる「平和の架け橋 in ヒロシマ」プロジェクトの計画・実施に際し、
あらゆる面で温かくご支援、ご指導くださった下記の団体および個人、さらにすべての支援者の方々に対し、
心から感謝の意を表します。

独立行政法人 国際協力機構(JICA) 駐日イスラエル大使館 駐日パレスチナ総代表部
公益財団法人三菱UFJ国際財団 信州善光寺玄證院
カトリック広島司教区平和行事委員会とカトリック観音町教会(野中 泉師)
特定非営利活動法人ANT-Hiroshima (代表・渡部朋子氏とスタッフの方々)
広島女学院大学(Rev. 澤村雅史先生と宗教センターの方々)
特定非営利活動法人I Pray 長野市ボランティアセンターとボランティアの方々
幼きイエス会(ニコラ・バレ) カトリック吉祥寺教会
村上 光田師(信州善光寺福生院大僧正) 鈴木 信一師(聖パウロ修道会管区長)
出川 展恒氏(NHK 解説委員) 出口 誠氏とジャズメッセンジャーズ
株式会社フランストラベルセンター シャディ・バシイ氏(神田アルミーナ オーナーシェフ)
比嘉依子氏

認定特定非営利活動法人 聖地のこどもを支える会 ヨハネ・パウロⅡ世財団(エルサレム)
理事長 井上 弘子 理事長 イブラヒム・ファルタス神父(フランシスコ会)



プロジェクトしめくりの「絆」ゲーム。
イスラエル・パレスチナ・日本の若者たち
はこうして友情の「絆」を確認した。

Final "Bond-building Game". Israeli,
Palestinian and Japanese youth affirmed
their bond of friendship through this
game.

GRATITUDES

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION "HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND", Organizer,
JOHN PAUL II FOUNDATION (Jerusalem), Co-organizer
of this Project ISRAEL/PALESTINE/JAPAN "LET'S MAKE A PEACE BRIDGE in HIROSHIMA 2017"
express their heartfelt gratitude to ALL THE SUPPORTERS,
especially,

JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY (JICA)
EMBASSY OF ISRAEL IN JAPAN PERMANENT GENERAL MISSION OF PALESTINE IN JAPAN
MITSUBISHI UFJ FOUNDATION SHINSHU-ZENKOJI GENSHO-IN & Rev. Kiwa FUKUSHIMA
CATHOLIC DIOCESE OF HIROSHIMA & HIROSHIMA PEACE PROGRAM,
CATHOLIC CHURCH OF KANNON-MACHI, Rev. Izumi NONAKA
NPO ANT-Hiroshima, Mrs. Tomoko WATANABE & their staff
HIROSHIMA JOGAKUIN UNIVERSITY, Rev. Masashi SAWAMURA
NPO "I PRAY" NAGANO VOLUNTEER CENTER
NICOLAS BARRÉ CATHOLIC CHURCH OF KICHIJOJI
Rev. Koden MURAKAMI (Archbishop of Shinshu-Zenkoji Fukusei-in)
Rev. Shinichi SUZUKI (Provincial of the Society of St. Paul) Mr. Nobuhisa DEGAWA (NHK News Commentator)
FRANCE TRAVEL CENTER S.A.
Mr. Makoto DEGUCHI and JAZZ MESSENGERS (Mr. S. UKON, Mr. U. YAMAGUCHI)
Mr. Shadi BASHIYI (Owner Chef of Al-Mina)

for their most warmhearted and effective support for the realization of THE PROJECT.

CERTIFIED NON PROFIT ORGANIZATION
"HELPING CHILDREN IN THE HOLY LAND"
President Hiroko INOUE

JOHN PAUL II FOUNDATION FOR THE MIDDLE EAST
President Fr. Ibrahim FALTAS, ofm

平和のメッセージ Messages of Peace

8月5日、渡部朋子さん（ANT-Hiroshima理事長）、澤村雅史牧師先生（広島女学院大学のチャプレン）のご好意により、広島女学院大学のチャペルで行われた「平和祈念礼拝」に参加させていただいた。「平和学習プログラム」のために各地から集まった大学生とともに平和を祈ったひとときであった。

礼拝では当プロジェクトの参加者からのメッセージとして、イスラエルとパレスチナおよび日本から一人ずつ、平和のメッセージを発する機会をいただいた。

（翻訳と通訳は、ANT-Hiroshimaのインターン生、向地由さんとアナリスさん）

シャローム（ヘブライ語で平和を意味する、挨拶に使われる）、こんにちは、サラム！

私は平和の架け橋プロジェクトに参加しているダナ・マガルです。

私は何度も戦争を経験してきたイスラエルという国からやってきました。ですから今日こうして広島にいられることにとても興奮しています。広島は平和な世界の実現の重要性を示しているからです。

72年前、今私たちが立っている場所で起きた悲劇は、戦争がいかに恐ろしく・悲惨なものであるかを私たちに示しています。10何万もの無実の市民が原爆によって亡くなりました。

広島の世界は、戦争による多大な苦しみを私たちに教えてくれており、だから私たちは平和達成のためにできることをやっつけていかなければなりません。

それと同時に広島はよりよい未来のための希望も示してくれます。悲劇の歴史にもかかわらず、発展し、いきいきと栄えた平和のシンボルとしての広島を私たちは見ました。

この場所は中東での平和が達成可能であることを私に信じさせてくれます。もちろん、それは決心と忍耐を必要とする長いプロセスではありますが。

私たちはどのようにして許し、協調していけるのかを学ぶ必要があると思います。

私はこの架け橋プロジェクトについてお話ししたいと思います。このプロジェクトはイスラエル、パレスチナ、日本の若者を見事につなぐ、とても素晴らしいプロジェクトです。

私たちは今も続く中東での紛争について話し合うことで他者の異なる意見や価値観に触れ、知見を深めています。

若者は平和を推し進めていくために特に重要な役目になりうること、また日本人が私たちをつなげるためにとても重要な役割を果たすと、私は信じています。

日本を訪れ、日本の魅力的な文化や歴史を知っていくことも重要です。

私たちがともにいるときに、たとえ自分たちが異なるバックグラウンドを持っていても、私たちには共通性があるということに気づかされます。

私はそれぞれが平和を作るものとなり、変化を起こせる人になることを信じています。私たちはお互いのよりよい理解のために話し合い、そしてその意見を自分たちの家族や友人に伝えていくことが出来ると思います。

私たちは未来の世代が、赦し、和解、正義や人権の尊重などの大切な価値観をもとに生きていくよう教育することが出来ます。

平和を実現するために最も大切なのは暴力を止めることだと私は思います。

暴力は恐怖と憎しみを生み出すだけでなく、平和をも阻害します。

オープンマインドに、そして私たちは同じ人間であることを胸に刻みながら、このような問題にアプローチしていくべきです。

将来、イスラエルとパレスチナの双方が満足できるような解決策を見出し、そして彼らと共に平和に生きていけることを願っています。

ありがとうございます。

ダナ・マガル／イスラエル



平和のメッセージを発表 ダナ・マガル
(イスラエル)
Speech of Peace Message Dana Magal
(Israel)

Shalom, Kon'nichiwa and salam !

My name is Dana Magal and I participate in a project called "let's make a peace bridge in Japan".

I come from Israel, a country that faced many wars and therefore I'm very excited to be here today in Hiroshima, a city that represents the importance in achieving peace. The tragedy that happened 72 years ago in the place we stand today, shows us how disastrous and cruel wars are. More than hundred thousands of innocent civilians died because of the atomic bomb. The history of Hiroshima shows us how much suffering is caused by war and therefore we should do everything we can in order to achieve peace. Hiroshima also represents hope, hope for a better future. Despite its' tragic history, I see today a developed, thriving and lively city which is a peace symbol to the entire world. This place makes me believe peace in the Middle East is achievable but it's a progress that requires determination and patience. We need to learn how to forgive and make compromises.

I would like to tell you about this amazing project. "Let's make a peace bridge in Japan" successfully unites Israelis, Palestinians and Japanese youth. We discuss the ongoing conflict in the Middle East and so we discover different point of views and deepen our knowledge. I believe young people can be especially instrumental in forwarding peace and the Japanese play an important role in connecting between us. In addition, by visiting Japan and getting to know the locals we learn about the fascinating culture and history of Japan. When we are together I realize we have a lot in common despite our different backgrounds.

I believe each of us can become a peace builder and make a change. We can encourage discussions that will lead to a better understanding, spread our opinions to family, friends and coworkers. We can educate the future generations to live according to important values such as forgiveness, reconciliation, justice and respect of human rights. In my opinion, the most important thing in order to achieve peace, is stopping the violence. The violence creates fear and hatred and eventually prevents peace. I believe we should approach to these issues with an open mind and to remember that in the end of the day we are all humans. I hope that in the future we will find a solution that satisfies both sides and we will live together in peace.

Thank you.

Dana MAGAL / Israel

皆さん、こんにちは。

パレスチナのラマラというところから来ました、タリーヌ・ラマです。私は、イスラエル・パレスチナ・日本の若者がともに参加している「平和の架け橋 in ヒロシマ」のメンバーです。このプロジェクトの目的は、共に話し、声を上げ、それぞれの経験や意見をシェアすることで、世界の人々が求めている平和な世界を目指していくことです。

そして今日、ここ広島女学院大学で皆さまと一緒に礼拝に参加する機会



平和のメッセージを発表 タリーヌ・ラマ
(パレスチナ)
Speech of Peace Message Taline Lama
(Palestine)

をいただくことができ、とても嬉しく思います。私たちは、自分たちの身の回りで起きていることに目を向け、そして人々が美しく、平和に、穏やかに生きられる世界を広げていくのだということを自覚する必要があります。

例えどのような生い立ち、肌の色、言語、宗教であっても、一人ひとりが心の中に平和・信念・愛と希望を持っていれば実現できるはずです。

マザーテレサは言いました、「もし世界を変えたいなら、家に帰りあなたの家族を愛しなさい。」

私は、一人の人間として、紛争や犯罪、悲しみや苦しみに満ち溢れた世界の中で平和を作るために大きなことをできるとは思っていません。

もし平和を作る人になりたいなら、私は自分の近くにいる人を愛することから始めなければなりません。

平和を作る人とは、日々の生活の中で小さな行動を起こし、世界をよりよいものにしていこうとする人です。

私たち人間は驚くほどの可能性を持っています。平和構築とは簡単ですぐに達成できる解決策ではなく、若者もお年寄りも、みんながお互いを学びながら進んでいくプロセスのようなものです。

広島を例にとって考えてみましょう。広島に落とされた原子爆弾はとても残酷なものでした。膨大な人々の命を奪い、街を破壊しました。原爆は、10万人以上もの罪の無い市民たちを殺しました。

そして今でも、多くの人々が放射能の影響に苦しんでいます。しかし、この大惨事があっても、日本は発展を止めることなく、日本の人々はあきらめず、生き続け、何度も立ち上がって、平和と生きがいを探して歩んできました。

そして私たちがその証人です。今私たちは前向きな気持ちと純粋な心、そして自分のことだけではなく自分が存在するコミュニティに関心を持ちながら、よりよく生きるための方法を探しています。

なぜなら広島は72年前のあの悲惨な原爆のあとから立ち直り、平和都市としてその地位を確立してきました。

戦争を生き、そして今もイスラエルによる支配のもとで生きる一人のパレスチナの女性として声を上げるため、私はここにいます。

私はごく普通の生活を求めています。

私はイスラエルによる支配、戦争、苦しみの終わりを探し続けています。

そして、平等・人権・自由に基づいた永久の平和を求めています。

平和とは私たちの責任です。もし平和がひとつの小さな笑顔から始まるとしたら、笑顔にあふれる世界がどのようなものか想像してみてください。

ありがとうございました。

タリーヌ・ラマ／パレスチナ

Hey everyone,

I'm grateful for having the chance to make part of "Let's make a Peace Bridge in Japan" Project between Israel, Palestine and Japan, to stand here in the Hiroshima Jogakuin University, being here, participating in this project means to talk, to raise a voice, to share a story, an experience, an opinion, to spread love seeking for what our world needs, what people are praying for, simply PEACE !

And, today, I have this opportunity to meet new people, understand different points of view, learn new cultures, accept others and to be aware of what is going around us, proving to the world that we, human beings, no matter what background we are from, what skin color we have, what language we talk, what religion we believe in, if we have the inner peace, faith, love and hope we will live in a beautiful, calm and peaceful place.

Mother Teresa once said: "If you want to change the world, go home and love your family", Me, as a single person, I know that I do not have the capacity to do much to have peace in a big world full of conflicts, crimes, wars, sadness and pain. So if I want to become a peace builder, I have to start to love who is near me. A peace builder is someone who acts in small ways everyday to make the world a more peaceful place starting by our small world. As human beings, we have incredible potential. It does not offer an easy or quick solution. It is an ongoing process of learning for young and old.

Let's take Hiroshima as an example. The atomic bomb on Hiroshima was brutal; deprived a tremendous number of people of their precious lives and turned the city into ruins. It killed more than hundred thousands of innocent civilians who had not done anything wrong, and to this day, many are affected by the radiation from back then. But this catastrophe did not stop Japan as a country to develop and Japanese to continue living, standing up again stronger and stronger, looking for peace, looking for a life worth to be lived. And the proof is us, today all together here, looking for solutions to live in a better place, with positive minds and pure hearts, caring about the interests of the community and not the single one.

Because Hiroshima declared itself a city of peace, after an atomic bomb burst overhead 72 years ago, I'm here to raise a voice, as a Palestinian girl, who lived the war al intifada, and still living the Israeli occupation. I'm asking for a normal life, a simple one, looking for an end to the occupation, to the pain, to the sufferings and to the war, and calling for a lasting Peace based on equality, human rights and freedom.

Peace is our responsibility and if Peace begins with a smile so imagine what a world of smiles can do. Thank you.

Taline LAMA / Palestine



平和のメッセージを發表 植田陽香 (日本)
Speech of Peace Message Haruka Ueda
(Japan)

本日は、このような場で発言をする貴重な機会をいただき、ありがとうございます。神戸市外国語大学4年の、植田陽香です。

この度、私たち日本人、イスラエル人、パレスチナ人は、戦争と平和について考えるために、広島を訪れています。ご存じのとおり、イスラエルとパレスチナは紛争状態にあり、長い間解決できず、両側から罪の無い一般市民が犠牲になっています。大切な故郷や、大切な家族、友人。かけがえのない大切なものを、簡単に破壊し、奪ってしまう紛争を、私は許せません。

「自分にできることなんて何もない」という大きな無力感と戦いながら、それでも紛争の解決、友の平和を願わずにはいられないから、このようなプロジェクトに参加をしています。

戦争と平和。10か月間パレスチナ自治区へ留学した際、これらに真に向き合う経験をしました。人との会話の中で、投げかけられた忘れられない言葉もたくさんあります。その中でも、隣国ヨルダンへ旅行した際に、戦禍を逃れてきたシリアの人々と出会ったことは、私にとって最も衝撃的な経験の一つでした。それは、平和な日本に帰った今でも、私の胸にぐっさりと突き刺さったまま、決してとれることのない棘のようにずっと残っています。

現地でシリアの支援をしている団体の活動に同行させていただき、傷ついたシリアの人々が運ばれてくる病院に連れて行っていただきました。大けがをしている人、意識の戻らない人。男性の中には、戦闘員として戦闘に参加し、負傷している人もいました。私とほとんど同い年の若者が、生々しく傷ついている姿に言葉が出ませんでした。そして、その中の一人が「戦うか、空爆されるかしかないんだ」と言ったこと。この言葉を聞いたとき、とっさに「世の中はおかしい。間違っている」と強く思いました。

誰だって平和に暮らしたい。誰かと傷つけあうことなんて、本当は誰も望んでいない。

それなのに、自分の力が及ばない大きな力のもとで、戦わざるを得ない人がいる。この状況は間違っていると心から思いました。自分の人生をかけて成し遂げたいことは、このような状況を変えること、紛争で苦しんでいる人を助けることだと考えるようになりました。

広島については、昨年のご縁があり、10回近く訪れました。資料館を訪れるたびに、平和記念公園でガイドの方とお話をするたびに、新たな発見があります。そして、原爆投下は、当時の政治や国際情勢、何を考慮したとしても、決して正当化できない人道に対する罪だと、毎回再認識しています。

この美しく穏やかな広島の地で、罪の無い大勢の人々の命が一瞬にして奪われてしまったこと、決して忘れてはならないし、二度と繰り返してはならない。そのために、平和を築くという強い意志を持って、これからも自分にできることを探して一つずつ積み重ねていくつもりです。

植田 陽香／日本

Thank you for the valuable opportunity to speak today. My name's Haruka Ueda, and I'm a fourth-year at Kobe City University of Foreign Studies. We -- Japanese, Israelis, and Palestinians -- have come to Hiroshima to think about peace and war.

As you all know, Israel and Palestine are in conflict, and innocent civilians on both sides have become victims as the conflict continues without resolution. People have lost their beloved hometowns, families, and friends. I cannot pardon the conflict in which these irreplaceable, precious things have been destroyed and taken away. I often fight with an overwhelming sense of helplessness, thinking "There's nothing I can do." But nevertheless I wish for a solution to the conflict and for peace for my friends, and for this reason I'm participating in this project.

War and peace. When I studied abroad for 10 months in Palestine, I personally faced these issues. There are many words and sentiments from my conversations with others that I cannot forget. And when I traveled to neighboring Jordan, meeting Syrian refugees fleeing from war was one of the most shocking experiences for me. Even now that I have returned to peaceful Japan, those experiences still pierce my chest like a thorn that cannot be pulled out.

I worked with an organization that supports people in Syria, and the organization took me to a hospital where it brings people wounded in the conflict. There were seriously injured people there, and some did not regain consciousness. Among the injured were men who had taken part in the fighting. I had no words when I saw the raw, wounded figures of young people around my own age.

One of them said, "We have no choice but to be bombed or fight." When I heard this, I thought, "This world is crazy; this is not right."

Everyone wants to live in peace. In reality, no one wants to hurt others.

And yet, there are people who have no choice but to fight when they are faced with a power greater than their own. From my heart, I think this is wrong. I came to believe that what I can accomplish with my own life is to change these situations and to help those suffering from conflict. I had the opportunity to visit Hiroshima around 10 times in the past year. I discover something new every time I visit the Peace Museum and every time I speak to a guide in the Peace Park. And every time I recognize anew that dropping the atomic bomb was a crime against humanity, no matter the politics or international situation at the time.

We will never forget that here, in our calm and beautiful Hiroshima, so many innocent lives were taken in an instant -- and we will make sure that the crime is never repeated. For that reason, I am strongly determined to help build peace in the world. I will keep searching for and adding, one by one, to the list of what I can do.

Haruka UEDA / Japan

1 プロジェクトの主旨と概要 Purpose and Outline of the Project

主旨

本事業は、イスラエル・パレスチナと日本の若者の間に「平和の架け橋」を築き、彼らを将来の平和の担い手、平和構築のリーダーとして育成することを目的としている。彼らに、共同生活、対話やボランティア活動を通し、「人間」「命」「平和」とは何かを考え、対立と敵対を乗り越え、相互受容と信頼のうちに友情の絆を結べる場を提供する。

日程	イスラエル・パレスチナ人：8月3日から8月19日まで17日間 日本人：8月4日から8月17日まで14日間
グループ構成	18～26歳の若者 イスラエル人 4名・パレスチナ人 4名・イスラエル国籍パレスチナ人 1名 日本人 6名 スタッフ 5名（日本人 4名、パレスチナ人 1名）
活動内容	1. 共同生活 紛争当事国と日本の若者が2週間の共同生活の中で、「平和共存」の可能性や、相互理解と相互受容の大切さを体験し、友情の絆を結ぶ。日本人はとくに、敵対国の若者たちの仲介役として、どのように「平和をつくるか」、「信頼関係を醸成するか」について学ぶ。 2. 「平和」と「戦争」についての学び 広島で原爆記念資料館を訪ね、被爆者の体験を聴き、平和記念行事に参加。戦争の愚かさや平和の大切さについて認識を新たにし、人々の苦しみや悲しみに共感する心を養う。 3. 国際文化交流 長野市民との国際文化交流、善光寺での仏教体験、ホームステイ。さらに子どもたちのためのボランティア活動に参加させていただき、助けを必要としている人々に寄り添い、奉仕する心を養い、共に協力して働く喜びを味わう。 4. ワークショップと対話 広島での学びや、長野での交流やボランティア活動の体験、とくにイスラエル・パレスチナ参加者の紛争体験を共有し、平和構築の具体的な「道」について考える。 5. プロジェクト成果の発信 一般市民のために報告会や交流会を行い、希望のメッセージを発信し、平和のために働く決意を表明する。

Purposes of our Project

The purpose of this project is to build “Peace Bridge” among the youths of Israel, Palestine and Japan, and to cultivate human resources that can contribute to peace as leaders in the next generation. We provide the opportunities to think about “human being, life and peace” throughout a communal life, dialogues and volunteer activities, to overcome animosity and conflicts and to develop the friendship based on mutual acceptance and trust.



長野市民ボランティアセンターで、市民の方々と国際文化交流イベント
International Cultural Exchange Event with the citizens of Nagano.
At the Volunteer Center

Schedule	Israeli and Palestinian participant s: 17 days (Aug. 2 ~ 19) Japanese participants: 13 days(Aug. 4 ~ 17)
Group composition	<ul style="list-style-type: none"> • Youth of 18-26 years old <ul style="list-style-type: none"> 4 Israelis 4 Palestinian 1 Palestinian with Israeli nationality 6 Japanese • Staff : 4 Japanese 1 Palestinian
Contents of Activities	<p>1. Communal Life In two-weeks communal life, the youths from the 2 countries in conflict and from Japan learn and experience the possibility of “peaceful coexistence” and the importance of mutual understanding and acceptance, and they make up the bonds of friendship. Japanese youths particularly learn how to “make a peace” and “foster relationship of trust” as a mediator of the youths from the adversarial countries.</p> <p>2. Learning about “Peace” and “War” Visiting Hiroshima Peace Memorial Museum, listening to the experiences of A-bomb survivors and participating in the Peace Memorial Ceremony. They acknowledge the silliness of war and the importance of peace again, and develop a sympathetic mind for the sufferings and the sadness of the others.</p> <p>3.Cultural Exchange Cultural exchange with Nagano citizens, Buddhism experience in Zenkoji, and home-stay experience. By participating in volunteer activities for children, they snuggle up to someone who need help, develop the mind of service, and experience the joy to work together.</p> <p>4. Workshops and dialogues Sharing what they learned through the various activities in Hiroshima and Nagano, and also sharing their personal experiences of the conflict, they try to discuss how to find a way of peace.</p> <p>5. Spreading of project results Through symposium or exchange program, they will transmit messages of hope and declare their decision to work for peace.</p>

2 総括 Summary of the Project



プロジェクトの総括

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会 理事長 井上弘子

English Translation : see P.18

はじめに

イスラエル・パレスチナ・日本の若者による平和のための国際交流事業の開催地は、今年度は広島、長野、東京であった。

2005年に始まったこの小さな平和の種まき活動は、毎年いろいろな方々のご理解とご協力があるからこそ継続することができ、紛争国の青年たちの間に、また平和貢献をしたいと願う日本人学生との間に友情を築くことができる。今年も、広島、長野、東京で実に多くの方々や団体のお世話になり、資金面でも実施面でも温かいご支援をいただいた。

このようなプロジェクトの準備と実施にあたって様々な困難に出会うのは当然のことだ。しかし一つひとつ困難に真摯に向き合って乗り越えていってこそ、目標とする「平和の架け橋」の土台を積み重ねていくことができるのではないだろうか。今年も決して平坦な道のりではなかったが、幸い多くの実りをもって無事に終了することができた。

皆様への感謝の心を持ってご報告をさせていただきます。

1. プロジェクト準備

今年は1月の段階からプロジェクト実施を理事会で決定し、事務局、および現地共催団体とスタッフとの協力体制作りをした。特に苦労したのは、資金

調達、参加者募集と選出である。資金面では幸い多くの支援者からの寛大なご寄付および三菱UFJ国際財団からの助成金のおかげで何とかまかなうことができた。またプロジェクトの広報や資金調達もかねて講演会やチャリティー・イベントも行った。ご協力下さった出川展恒氏（NHK 解説委員）や出口誠ジャズメッセンジャーズの方々にも感謝したい。

プログラム作りや宿泊場所については、NPO 法人 Ant-Hiroshima 代表・渡部朋子氏、カトリック広島教区の平和行事实行委員会、また信州善光寺玄證院住職福島貴和師のご協力はとても大きな助けとなった。

参加者募集方法については、イスラエル・パレスチナ側、日本側とももう少し幅広く告知できるよう改善しなければならない。今回は応募者数が比較的少なく、しかも男女比に偏りがあり、特に日本人は女子のみになったのは残念であった。選出したのは、パレスチナ人4名、イスラエル人4名、イスラエル国籍のアラブ人1名、日本人6名である。

個々の準備過程については、p.21の「事務局準備」をご覧ください。

2. プロジェクト実施

1) 広島での活動（8月3日夕方～8月7日朝）

スタッフを含めた総勢20名は広島に、8月4日から7日まで滞在。カトリック広島教区の平和行事参加グループの一つとして、観音町教会に宿泊させていただいた。

プログラムは、Ant-Hiroshima 代表渡部朋子氏やカトリック広島教区平和行事委員会、広島女学院大学教授澤村雅史牧師のご協力のおかげで大変充実したものとなった。広島滞在中、ずっと私たちのグループに付き添って案内して下さった、ANT-Hiroshima のインターン生、向地由さんとアナリス・ガイズバートさんには心から感謝したい。

8月6日は、原爆投下記念日の平和祈念式典への参加、核兵器の非人道性を生々しく伝える「広島平和祈念資料館」の見学、日本各地から来た人々とともに原爆供養塔からカテドラルまでの平和行進、子どもたちが演じるミュージカル「I Pray」（核兵器の廃絶と平和な世界の実現を目指す創作劇）の鑑賞、被爆者の体験の拝聴、さらに「命」の力強さを感じさせる「被爆樹木」の見学など盛りだくさん。

また、平和学習で広島に滞在中だった他大学の学生たちと共同で平和を祈る交流プログラム（広島女学院大学）の中で「平和を願うパイプオルガンの響き」としてヤクープが演奏したほか、イスラエル・パレスチナ・日本の若者がそれぞれ平和のメッセージを発信する機会をいただいた（報告書 P. 6～8 参照）。沢村牧師はお話の中で、「人は昔から『平和をつくるために戦いに備えよ』という。何と矛盾した話だろうか。『もう一つの道』(the alternative) 『変革の道』(the change) を見つけて歩むことこそ、未来を担うあなた方のつとめではないだろうか?」と、そこにいたすべての若者を励まして下さった。

どのプログラムも、戦争の愚かさや悲惨さ、平和の大切さを若者たちの心に強く訴えるものであり、平和のために働く必要を強く感じさせた。

広島での問題：しかし、いろいろな想定外、想定内の困難にもぶつかった。イスラエル・パレスチナの参加者の長いフライトによる疲れも癒えぬままに高温多湿の酷暑の中で始めた少しハードな活動、不慣れた共同生活と銭湯通い、それに追い打ちをかけたのが台風5号の接近で、予定の交通機関が運行中止となってプログラムの変更などが余儀なくされた。特に若者が楽しみにしていた宮島訪問のキャンセルや広島から長野への移動のルートや時間の大幅な変更があり、若者たちの心身に大きな負担になったのは否めない。

しかも、いろいろな事態の対応に追われて、スタッフ間の事前の打ち合わせが十分ではなく、コンセン



初めて乗る新幹線にて
The first experience for them of Shinkansen. So fast!!!



観音町教会で、みんな揃って朝食タイム
First breakfast with the new friends at Kannon-machi Church, Hiroshima

サスが乱れたことも認めなければならない。

2) 長野での活動 (8月7日夕方～8月14日朝)

宿泊所は昨年と同じ信州善光寺玄證院の宿坊であった。

*ワークショップ・セミナー

今年は長野滞在中に、ワークショップを始めた。例年より JICA での滞在日数が少なかったからである。しかしいろいろな事情で、予定どおりにはできなかった。

まず初めに、広島での活動の振り返りや体験・感想の分かち合いをし、次に「平和の架け橋を築く」というこのプロジェクトの目的確認を3つのグループに分かれて行い、それをどのように実現していくかについても話し合った。

さらに、紛争の個人的な体験として、悲しみや苦しみ、怒りや恐怖などを感じた出来事を分かち合った。話す側が胸に秘めていた思いを口に出すことができたのも、また、聴く側がそれぞれの話を尊敬の心を持って受け止め共感を覚えることができたのも、この数日間たとえ困難があっても、すでに共同生活を通して親しくなりはじめ、友情が芽生えていたからこそであろう。

この分かち合いの体験は辛くても、これから「平和構築の道」を歩もうとする彼らにとって、必ず通らなければならない過程だと思う。互いにありのままを受け入れ、理解することこそ、平和への第一歩だからだ。

*国際交流

国際交流イベント

11日に行われたイベントでは、長野市民60人以上の方々に参加して下さり、楽しい「国際文化交流」ができた。若者たちはアラブの伝統ダンス「ダブケ」、イスラエルの「フォークダンス」、そうらん節、盆踊りなど、3カ国の伝統ダンスを披露し、自分たちで準備したイスラエル・パレスチナの手作り料理も味わっていただいた。さらに地元の合唱団「カント・キアラ」やゴスペルグループ、ハンドベルグループの演奏も加わり、交流会を盛り上げてくださった。

イベントで披露するダンスは難しく、練習の過程で何度も挫折しそうになったが、それでも若者たちは最後まであきらめずに助け合いながら取り組み、何とか成功させた。互いの国の文化を多少とも味わい、心の一致を生み出すことができたろう。

ボランティア活動

飯綱高原で開催された子どもたちのためのボランティア活動に参加させていただいた。大自然の中で大人や子どもたちと一緒にイワナ釣りやバーベキューを楽しんだ。

ホームステイ

若者たちが最も喜んだことの一つは、ホームステイである。各家庭での温かい心のこもったおもてなし、小さな子どもたちと言葉の壁など関係なく楽しんだひときは、忘れがたい貴重な体験であった。

若者たちが長野で、大自然の美しさを味わい、ホームステイやイベントなどを通じて日本の文化の素晴らしさや人の心の温かさに触れる活動ができたのは、

長野市ボランティアセンターを介して集まって下さった多くのボランティアの方々のおかげである。

*共同生活と異文化受容の難しさ

共同生活はいつも難しい。文化も習慣もメンタリティーも異なる日本に初めて来た「現代っ子」の若者たちにとって、いきなり密度の濃い共同生活はかなりハードなものだったろう。しかも広島での疲れが溜まっていたのだ。無理もない。小さなわがままやいらだち、不満や怒りがなかった訳ではない。集合や就寝・起床など時間を守れない者や、スマホに夢中になって仲間とコミュニケーションを取ることが難しい者。注意をすれば反抗的な態度を取る者もあった。汚い足で家の中に上がったり、布団の上を歩いたりしない、など日本では当たり前のことさえイスラエル・パレスチナの若者たちには負担となったようだ。このような困難は毎年あることだが、今年は例年より顕著だったように思える。日本滞在中、ずっと悪天候が続き、特に自由時間には雨が激しくなることが頻繁にあって、思いっきり気分転換を図れなかったことも一因かもしれない。

しかしながら、少しずつ互いに忍耐し、受け入れ合い、許しあうことによって困難を乗り越えて「平和共存」を実践する学びの場だったのではないだろうか。

3) JICA東京国際センターでの活動

(8月14日午後～17日朝)

東京での活動目的は、最終的な対話や分かち合いを通してプロジェクトのまとめを行い、互いの間に築かれた「平和の架け橋」を確認し、今後具体的にどのように平和のために働けるか、その道筋を見出していくことであった。

一つのワークショップでは、参加者がプロジェクト中に感じたフラストレーションやわだかまりなど、忌憚なく話してもらった。それはありがたいことであった。主催側の私たち自身の準備や、メンタリティーや文化の違いに対する理解、忍耐などが十分ではなかったことを再認識することができたと同時に、互いに謙虚に心をオープンにし、理解し合い、赦し合い、和解し合う新たな機会になったからである。

その上でこのプロジェクトで得た実りについてレポートを作成し、提出させた。



交流会での披露に向けて、ソーラン節を練習
Practice of "Soran-bushi" for the Cultural Exchange. So hard!!

3. 反省点と課題

上述のように、今年はいろいろな問題にぶつかったが、その理由は多々ある。

◎意志伝達系統が不明確だったこと

◎共同生活に最低限必要な規則遵守の精神を徹底できていなかったこと（スケジュールの時間厳守、インターネットの使用制限など）

◎メンタリティーの多様性や生活習慣の違いについての理解が不足していたこと

◎プログラムが少し過剰だったこと

次回への課題である。

終わりに

イスラエル・パレスチナの紛争が始まって今年で100年、1967年イスラエルによる占領政策が始まってから50年も経つ。今もって紛争解決の糸口は見えず、1933年のオスロ合意によって生まれた「二国家平和共存」という希望の光は、かすみ始めている。相変わらずイスラエル・パレスチナの若者たちは、それぞれ相手を「敵」と認識しており、「平和」とは何かを知らない。しかも彼らが次世代の担い手とならなければならないのだ。

この小さなNPOの活動目的は彼らの心に小さな「平和の種」を蒔くことである。個人同士の小さいさかいから、国と国との大きな紛争に至るまで、す

べての争いの原因は突きつめれば同じ、エゴイズム、そしてコミュニケーションの欠如である。もちろん、日本でたった2週間のこのプロジェクトは、膨大な「平和」問題の前に、まったく取るに足らない。しかし日本人を交えた共同生活や対話を通して、平和への道の障害は何か、人と人との間にある壁は何か、どのようにそれを乗り越えるかを考え、信頼を醸成し、友情を育成する小さなラボラトリーになっているのではないだろうか。

後日談になるが、プロジェクト後、日本人参加者2名が、それぞれ、イスラエルとパレスチナを訪れ、今は友となった現地の若者と再会を喜び、ホームステイやミーティングなどをしたという。またこの9月エルサレムを訪れた私に、思いがけない喜びと感動が待っていた。実は2009年にプロジェクトの証しとして、参加者・スタッフ全員が1ドルずつ出しあって、オリーブの小さな苗木をノートルダム・センターの庭に植えた。今は4mほどに成長したそのオリーブの木が、今年初めて新鮮な緑の美しい実をたくさん結んでいるのを見たのである。私はいのちの逞しさと同時に大きな慰めを感じ、私たちが蒔き続けている小さな「平和の種」も、必ずいつかどこかで、多くの実を結んでくれるとあらためて信じ、希望を持つことができた。

Summary of the Project

Hiroko Inoue
Chairperson of Certified non-Profit Organization "Helping Children in the Holy Land"

Introduction

The international exchange project among Israeli, Palestinian and Japanese youths was held in Hiroshima, Nagano and Tokyo this year.

This small activity to sow seeds of peace started in 2005 has been since carried on with people's understanding and support every year. We can also build a friendship among students from the countries in conflict and Japanese students who would like to contribute to peace. This time too, so many people and groups took care of us and received warm support from them both in financially and operationally.

The preparation and implementation of a project of this kind is not so easy. But we believe that we can build a foundation of our "peace bridge" only if we make every possible effort to overcome to face each hardship. Fortunately, the project was ended with a great success in spite of some difficulties we encountered. We would like to release a report of the project with gratitude.

1. Preparatory Period

This year, our board of directors decided in January to implement this project, and set up a system of collaboration between our secretariat and our local staff and the John-Paul II Foundation, our co-organizer. The hardest work was fundraising and selection of participants. Fortunately, many supporters donated to us generously and we received a grant from Mitsubishi UFJ Foundation to cover the costs. We also held lecture meeting and charity events for PR and fundraising. We would like to thank to Mr. Nobuhisa Degawa (News Commentator at NHK) and members of Makoto Deguchi Jazz Messengers who helped us to hold these events.

Ms. Tomoko Watanabe, representative of NPO ANT-Hiroshima, Executive Committee for Peace Program of Catholic Hiroshima Diocese, and Mr. Takakazu Fukushima of Shinshu Zenkoji Genshojin gave us a big help to make a better program and to provide accommodations.

We have to improve our way of recruiting

participants in order to choose from a larger range of candidates. This time we had relatively a few number of applicants not only from Israel and Palestine but also from Japan. The proportion of males to females was not balanced, and in fact, we only had females from Japanese. We selected 4 Palestinians, 4 Israelis, 1 Arab of the Israel nationality and 6 Japanese. Please refer to the page 22.

2. Implementation of the Project

1) Activities in Hiroshima (Aug. 4th to 7th)

20 people including the staff stayed in Hiroshima from Aug. 4th to 7th. We stayed at Catholic Kannonmachi Church as a participation group of the Peace Program held by Catholic Hiroshima Diocese.

The programs were substantial with the help of Ms. Watanabe, the representative of ANT-Hiroshima, Catholic Hiroshima Diocese and Reverend. Masashi Sawamura of Hiroshima Jogakuin University. We specially thank two intern students, Yui Mukoji, and Annelise Giseburt who attended us very kindly during our stay in Hiroshima.

We had many activities on Aug. 6th such as 1) participation in Peace Memorial Ceremony, 2) visits to Hiroshima Peace Memorial Museum which convey vividly how inhuman are the nuclear weapons, 3) participation in the Peace March with many people coming from various areas of Japan, 4) appreciation of the musical "I Play (original drama aiming at the abolition of the nuclear weapons and the realization of a peaceful world)" that children played, 5) listening to the experiences of A-bomb victims, and 6) visit of hibaku-jumoku (A-bombed trees) giving us hope and strength of the life, 7) participating to the prayer service for peace in Hiroshima Jogakuin University.

This was a program of peace study for the students of several universities and to which Rev. Pastor Sawamura kindly invited us. During this prayer service, Ya'coub played pipe organ as "sound of the pipe organ in hope of peace". We also had an opportunity to send peace messages from the 3 countries to the attendants. (Refer to P.#) Reverend Sawamura encouraged all the youths with these words. "There is an old saying: If you want peace,

you have to be ready for war. What a contradictory saying! Isn't it your duty, you, youngsters who are going to carry the future, to find "an alternative way" and "a change" and to walk towards them?"

All the programs were appealing to the youth the absurdity and the tragedy of the war, and the importance of the peace inciting them to work for peace.

Problems in Hiroshima: We encountered both expected and unexpected problems. A hard schedule in hot and humid summer days after the long flight from Israel and Palestine, a communal life and unfamiliar situation such as using public bath. As one misfortune followed another, the typhoon No. 5 came close and we were forced to change some programs by transportation stops.

It must be a disappointment and burden for youths because of the cancellation of Miyazima sightseeing that they were looking forward to in particular and a large route change from Hiroshima to Nagano. In coping with the different and unexpected situation, we must recognize that the staff couldn't sometimes have enough time to make arrangement among them.

2) Activities in Nagano (Aug. 7th to 14th)

Shinshu Zenkoji, Genshojin offered us the accommodation as same as last year.

Workshop/Seminar

We started workshops during the stay in Nagano because of the short stay in JICA. We must say that sometimes we could not proceed as scheduled for many reasons.

The participants has begun their workshop looking back the activities in Hiroshima and shared feedbacks reminding to themselves the preciousness of peace.

Then, divided into three groups, they discussed how to achieve the goal of this project "Peace Bridge".

They also shared their personal experiences of sorrow, pain, anger and fear that they felt because of the conflict. The speakers could get out their inmost feelings and the listeners tried respectfully to listen and understand each story. Fortunately they have already become friends through this communal life.

This sharing experience should have been hard for them, but it was an important process they definitely had to go through before walking into "the path for peace building". It is a first step for peace to accept and understand each other.

International Cultural Exchange

International Cultural Exchange Event

On Aug. 11th we held a cultural exchange event and more than 60 Nagano citizens joined us and enjoyed with us. The youths performed traditional dances of three countries, Arabic dance "Dabke", Israeli "Folk dance", and Japanese "Soran Bushi" & "Bon Odori". Moreover they served to the people arabic dishes which they had cooked themselves. We were glad that a local chorus group "Canto Chiara", a gospel group and a hand bell group gave us their wonderful performances and warmed up our event.

The practice of the traditional dances was so hard that some of them was going to give up. But supporting each other, they finally ended in success. Their hearts were united little by little experiencing like this the diversity of the cultures.

Volunteer Activities

We participated in a volunteer activity for children held in the beautiful Iizuna Highland and enjoyed outdoor activities like fishing and barbecue with children.

Home stay

One of the most enjoyable experiences for the youths was home stay. It must be a very good souvenir to be welcomed by each family and have a wonderful time playing with little kids in spite of language barriers.

Thanks to the Nagano citizens, especially to the volunteers and the host families, the young participants could admire and enjoy the wonderful nature and culture of Japan and also appreciate the warm hospitality toward them. Our special gratitude goes to the Nagano City Volunteer Center which helped us to do these activities.

Difficulties of Communal Life and Cross-Cultural Tolerance

The communal life is always hard. For "today's youths" who have different cultures, customs and mentalities, and who have just come to Japan for the first time, it should be so tough to live altogether a communal life. And I understand that they felt tired with the intensive activities since their arrival in Japan. There seems to be a little selfish mind, frustration, murmur and anger. Some youths could not keep time and some tended to be absorbed in communication on a smartphone. Sometimes they became a little bit sulky when we gave a few words to them. Japanese rules might be a burden to the youths of Israeli and Palestine such as not entering a house with dirty feet and not walking on Futon



広島女学院大学のチャペルでの平和を祈る交流プログラム
 "Prayer service for peace" at Hiroshima Jogakuin University

(Japanese-style bedding). We always have the same kind of problems every year, but this year, they were little bit more apparent than the other years. The fact that we had almost always a rainy weather was not helpful for them. It was not easy for them to have change and refresh themselves. However, they have overcome these difficulties by learning to forbear a little by little, to accept and forgive each other. We believe it could be a good practice of peaceful coexistence.

3) Activities in JICA Tokyo International Center (Aug. 14th to 17th)

The purpose of the activities in Tokyo was to sum up, through the last dialogues and sharing, the results of the project, and to make sure if a "Peace Bridge" was built among them, and finally, to find how to work for peace concretely in the future.

In a workshop, we asked them to talk very freely about frustration and discomfort they felt during the project. We appreciated their frank sharing because we could recognize ourselves that our own understanding and patience regarding the diversity of mentality were not enough. We could humbly open up our mind, understanding each other, forgiving each other and reaching a reconciliation with each other.

3. Reflections and Problems

As I mentioned above, we had many problems this year because of following reasons;

- Insufficiency of communication.
- The rules of conducts, agreed by all the participants prior to the project, were not observed very well. (Punctuality, usage restriction of internet, etc.)
- Shortage of understanding the diversity and difference of customs and mentalities.
- Too many activities.

Conclusion

100 years has passed since the conflict between Israel and Palestine started. It has been 50 years from the beginning of the occupation of the West Bank by Israel. We have not yet found a key to solve it. The hope of the "two-state solution" proposed by Oslo Agreement in 1993 is fading away. Many youths of Israel and Palestine still consider the other side as "enemy" and do not know "what is peace", or "how to live in peace" although it is their generation who has to assume the role of peace building in the future.

The purpose of this small NPO project is to sow tiny "seeds of peace" in their hearts. From a small quarrel between individuals to a big conflict between countries, the causes of these discords are always the same: egoism and lack of communication. Of course, our two-weeks project is almost nothing before the huge issues of "Peace". However, the communal life and dialogues together with Japanese youngsters can be a small laboratory to promote mutual trust and to build friendship.

I am happy that after the project two Japanese participants visited Israel and Palestine. They rejoiced to see again the Israeli and Palestinian youths who were now friends and who hospitalized them. Moreover, when I visited Jerusalem this September myself, I was so moved and glad to see an olive tree bearing a lot of fresh and green olives in the garden of Notre Dame Center of Jerusalem. Actually we had planted there in 2009 a very tiny plant of olive as a testimony of our project. It has strongly grown up to about 4 meters high with a lot of beautiful leaves and fruits. I saw the vigor of life in this tree. And being comforted very much, I found again hope and confidence that our small "seeds of peace" will bear fruits, for sure, somewhere in the future.

3 準備 Preparations



折り鶴をあしらったプロジェクトTシャツのデザイン。

1. 準備 (日本とイスラエル・パレスチナで)

実施月	準備	活動の概略
1月	プロジェクト実施決定	NPO法人理事会においてプロジェクト実施を決定。共催団体は例年のとおり、JOHN PAUL II FOUNDATION。今年は、ヒロシマでの《平和の学び》、長野での国際文化交流とボランティア活動、対話と共同生活を目的とする。
2月～5月	プログラムの作成と調整	広島・長野の協力団体・協力者と、プログラムについての協議・調整
4月～6月	協賛・後援の申請	JICA、駐日イスラエル大使館、駐日パレスチナ総代表部
	宿泊施設、交流会会場の予約	カトリック広島教区の《平和行事》参加と宿泊許可。信州善光寺玄證院の宿泊許可。長野ボランティアセンターのホール予約。 JICA東京国際センター 宿泊、セミナールームなどの予約。
2月～8月	支援金募集 助成金申請	プロジェクトのポスター、チラシを作成。支援者や各支援団体へ送付。数団体に助成金を申請。三菱UFJ国際財団から70万円の助成金を頂く。
4月～6月	参加者募集と選定	インターネットあるいは口コミなどで、参加学生募集。 共催団体JOHN PAUL II FOUNDATIONと共に、イスラエル・パレスチナから招聘する若者(9名)を選定、また日本の学生(6名)も書類審査、面接(スカイプも含む)を経て選定。
5月～7月	交通手段の準備	イスラエル・パレスチナ人の航空券購入。国内交通手段も確保《東京～広島～長野の新幹線を含むJR乗車券、長野～新宿の路線バス切符購入、現地でのレンタカー予約》
6月～7月	VISA手続き	パレスチナ人の日本入国ビザを取得するための書類作成、エルサレムへ送付。日本大使館(テルアビブ)へビザ申請、受け取り。
6月 24～25日	事前研修 (日本)	日本人参加者のため、JICA東京国際センターにて事前研修を実施。 (イスラエル・パレスチナ紛争への理解を促進)
6月～7月	事前研修 (イスラエル・パレスチナ)	イスラエル・パレスチナからの参加者のため、エルサレムにて事前研修を2回実施。(日本の社会、原爆投下などについて学習、参加者同士の親睦を深める)
7月 2日、17日	チャリティー・イベント	1) 出川展恒氏(NHK解説委員)による講演会「混迷する中東情勢を読む」 2) 「イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい」(いずれも約100名の聴衆)
7月中旬～ 8月中旬	直前準備	食料品、医療品、雑貨などを購入し、長野の玄證院に送付。 Tシャツ、旅のしおり、名札などを作成。

1. Preparation (in Japan & in Israel-Palestine)

Month	Heading	Detail
March	Decision to carry out the project	The executive committee decided to implement the project. "JOHN PAUL II FOUNDATION" was to be the co-organizer as usual. Main purpose is "Peace Study" in Hiroshima and Cultural Exchange, volunteer works, dialogues and sharings.
February - May	Making Program and Schedule	Consultation about the program and schedule with organizations and collaborators in Hiroshima and Nagano
April - June	Application for sponsorship	Obtained approval from JICA, the Embassy of Israel, the General Mission of Palestine.
	Reservation of accommodation, seminar rooms and location for the exchange event	Catholic Hiroshima Diocese : Approval for participating "Peace Program" and facilities for accommodation. Zenkoji Genshoin : Approval for facilities for accommodation Nagano Volunteer Center : Reservation of the Event Hall.
February - August	Fundraising	Made posters and leaflets for fund-raising, started distributing materials to supporters and supporting organizations. We are granted a subsidy (¥700,000) by Mitsubishi UFJ Foundation.
April - June	Recruitment	Recruitment of participants through internet as well as NPO's connections. Selection of nine members from Israel and Palestine in collaboration with the co-organizer JOHN PAUL II FOUNDATION. Selection of 6 Japanese members through application documents and interviews (including by skype).
May - July	Reservation of transportation	Purchase of flight tickets for Israelis and Palestinians. Reservation of transportation means in Japan; tickets of JR from Tokyo-Hiroshima-Nagano, tickets of bus from Nagano-Tokyo and a rent-a-car.
June - July	Application for VISA	Preparation of documentations to obtain Palestinians' entry VISA, sending them to Jerusalem. Local staffs went to the Embassy of Japan in Tel Aviv to apply for and receive visa.
24 - 25 July	Preparatory Seminar (for Japanese)	At JICA Tokyo International Center, preparatory seminar for Japanese participants to learn and understand about the conflict between Israel and Palestine participants.
June - July	Preparatory Seminar (for Israelis and Palestinians)	Preparatory seminar twice in Jerusalem for Israeli and Palestinian participants with the purpose of learning about Japan and atomic bombing, and promoting friendship.
2,17 July	Charity Events	1) A lecture on the actual situation of the Middle East by Mr. Nobuhisa Degawa (NHK News Commentator). 2)"Friendship Party": Concert by Mr. Makoto Deguchi and Jazz Messengers, and a buffet of Mideast dishes.
Mid July-August	Last purchases and arrangements	Purchase of food, medical supplies and other necessary items for the activities, and sent them to Hiroshima and Nagano. Made T-shirts, itineraries and nametags.

2. 日本人参加者の事前研修

2017年6月24日(土)と25日(日)にJICA 東京国際センターにて、日本人参加者の事前研修を行った。イスラエル・パレスチナ紛争の歴史と現状、平和への展望について理解を深めてもらうためである。

1日目は、代表の井上から、このプロジェクトが発足したきっかけやプロジェクトの目的、目指すものについての説明があった後、参加者同士の自己紹介をした。午後には、広島と長野での活動の紹介と、ソーラン節の練習をした。

1日目の最後に、イスラエル・パレスチナ側の参加者と Skype で会話して、プロジェクトへのモチベーションを高めることができた。

2日目の研修は、事前課題としてイスラエル・パレスチナ問題について調べたことを各々発表した。発表内容は、下記の4テーマ：

- ・ホロコーストとユダヤ人 (谷田 怜海)
- ・入植地 (高田 結生)
- ・2国家共存は可能か (塚田 美優)
- ・エルサレム問題 (原田 直美)

発表後、知識共有と意見交換も行なった。

最後にプロジェクト参加への意気込みとして、決意表明を作成して発表した。この勉強会は、プロジェクト参加者の「平和理解」を深めるために役立った。

2. Preparatory Seminar for Japanese Participants

A preparatory seminar was held for Japanese participants on June 24th and 25th, 2017, at JICA Tokyo International Center. The purpose is to help them to understand better the history of the Israeli-Palestinian Conflict, its actual situation, and the perspective of the way for peace.

Day1:

In the beginning of the Seminar, Hiroko Inoue, the president of the NPO, presented to the participants the history of the project, its vision, purpose and goals. And then, they introduced themselves to get to know each other. After lunch, the schedule and the activities in Hiroshima and Nagano are presented to them. And then, they practiced Soran-bushi dance. After the dinner, they talked with Israeli and Palestine participants on Skype about the current situation of Jerusalem.

Day2:

Each participant made a presentation on a topic that had been assigned to her prior to the seminar.

Presentation on 4 topics concerning the Israeli-Palestinian Conflict:

- ・ Holocaust and Jewish (Remi Tanida)
- ・ Settlements (Yui Takata)
- ・ 2 States Solution (Miyu Tsukada)
- ・ Issue of "Jerusalem" (Naomi Harada)

Then, they discussed on each topic, shared information and exchanged their ideas.

At last, having understood better their roles and the goals of the project, the participants stated, one by one, their resolution on taking part of the project. This workshop was very useful for the project participants to understand better what peace is.



初めて浴衣を着るイスラエル・パレスチナ参加者
Israeli and Palestinian participants wore for the first time Yukata

3. イスラエル・パレスチナでの事前研修

イスラエル・パレスチナ参加者のための事前研修を、エルサレムのヨハネ・パウロ2世財団事務所で開催。井上もスカイプで短時間参加。はじめに各自自己紹介をした。その後、原爆が投下された広島動画を見た。

彼らは広島動画の強烈な映像を見て、とても衝撃を受けたとともに動揺していた。動画を見終わった後は、どのように感じたかをまとめる時間をとり、そして感じたこと、思ったことをみんなで共有した。

共有した主な内容としては、なぜ人は他の人にこれほどまでもひどいことが出来たのか？なぜアメリカは二度目の原爆を投下したのか？なぜ人類はこれほどまでの惨禍を耐え忍ばねばならないのか？なぜ人はこれほどまでも残酷になれるのか？このような最期を迎えて当然な人がいるだろうか？ということだった。

そしてこれらの内容を共有して、参加者は平和のために、それぞれの違いや争いを乗り越えていくことを心がけるべきだということでもまとまった。

次に、本プロジェクトについて、目的や活動内容、予定などを説明した。幸運にも偶然にモランとダナ、バシヤがプロジェクト期間中に誕生日を迎えることがわかった。そして、休憩をとった後、盆踊りとソーラン節の練習をした。盆踊りは15分ほどでみんな踊れるようになった。しかし、ソーラン節はとても難しく2時間ほど練習した。

1回目の事前研修は15時にて終了、参加者はお互いを知ることができたことに満足し、笑顔で別れた。ただ、ソーラン節の練習でみんな少しばかり足が疲れていたが……。次回は、6月11日に再会することとした。

3. Preparatory Seminar for Israelis & Palestinians

We started our meeting at 11:00 at the John Paul II Foundation Office in Jerusalem, by introducing ourselves to each other and Hiroko was on skype with us. Then I showed them three YouTube videos on the tragic disaster of Hiroshima and its terrible consequences.

I could see how much they were touched and affected to see these so strong footage videos. Therefore, I gave them a few minutes to digest and understand what they watched so that they could share with each other their feelings and thoughts.

The main idea of the sharing was: why would a person do such a thing to the other persons, why did they need another bomb on Nagasaki after Hiroshima? Why do human beings need to suffer that much? Why can we be so cruel sometimes? Does anybody deserve such an ending? We should try to overcome our own differences and conflicts to find peace and resolution in the world.

Then I explained a little bit about the project, its purposes, the possible activities and the outline of the schedule. We found a nice coincidence that 3 of the Israeli girls have their birthdays on August, and consecutively Moran on 3/8, Dana 5/8 and Basya 7/8. Then we took about half an hour for a snack break, before starting to practice and to work on the dances the Bon -Odori, and Soran Bushi. Bon-Odori was so easy that we mastered it in about 15 minutes, but we practiced 2 hours the Soran-Bushi as it was a very difficult dance.

They left the meeting greeting each other with a big smile showing their joy of knowing each other and their satisfaction of the meeting, but at the same time with much pain in their legs because of the practice of Soran-Bushi. It was around 15:00, all looking forward to meeting each other again on the 11th of June.

Ya'coub Ghazzawi

4. チャリティー・イベント Charity Events

講演会『混迷する中東情勢を読む』

出川展恒氏 (NHK 解説委員)

7月2日、東京都武蔵野市のカトリック吉祥寺教会で、NHK 解説委員出川展恒氏による講演会が開かれた。講演のテーマは「中東和平の現状」で、次のような内容だった。

1993年のイスラエル、パレスチナの歴史的な自治合意（オスロ合意）で和平交渉の進展が期待されたが、交渉は中断したままで報じられることもほとんどなくなっているのが実情。

67年の通称「六日戦争」でイスラエルに占領されたヨルダン川西岸とガザにパレスチナ自治区を設け、和平交渉を進めるとしたのがオスロ合意で、最終目標はイスラエルとパレスチナの「二国家共存」だった。しかし、交渉は相互不信や暴力でしばしば中断。95年11月、交渉に積極的だったラビン首相が、極右のユダヤ人に暗殺されたことで和平の流れは変わってしまった。アメリカのオバマ前大統領の仲介で2010年9月に交渉が再開されたが、西岸への入植活動の凍結をイスラエル側が受け入れないことなどが原因で続かなかった。アメリカの新大統領トランプ氏は就任間もない今年2月、「二国家」にこだわらない姿勢を示したほか、入植には基本的に反対しないなどイスラエル一辺倒で、明確な和平戦略があるのかわからない。

そんな中で気になるのは、イスラエル国民の60%以上が「西岸は占領地だと思っていない」と答えた、という最近の世論調査結果。1967年以後に生まれた「戦後」世代は西岸が戦争でイスラエルにより占領されたことを教えられておらず、元々イスラエルの土地だったと思っているわけだ。しかもパレスチナとの境界に建てられた壁で確かにテロが減っているため「このままでいいじゃないか」との考え方がイスラエル側に広がり、和平の機運が失われていっている。

和平プロセスを動かすにはどうしたらいいのか。まず、暴力を食い止めねばならない。二国家共存論の再生も必要。それに、オスロ合意以外の和平へ向けた枠組が必要で、それができるまでは入植地不拡大などで現状を凍結する必要がある。和平プロセスが

再び動き出すためには両民族の市民レベルでの信頼醸成が大切で、その意味で「聖地のこどもを支える会」の活動は、気が遠くなるほど遠い道のりではあっても、意義あるものだ。

出川展恒 (でがわ・のぶひさ)

1985年、NHK入局。91～92年テヘラン、94～98年エルサレム、2002～06年カイロの各支局長を経て06年7月から中東・アフリカ・イスラム地域担当の解説委員を務める。



Lecture Meeting by Mr. Nobuhisa Degawa (NHK News Commentator)

“Interpretation of the confusing political situation of the Middle East”

A lecture by NHK Commentator, Mr. Nobuhisa Degawa, a part of a support of summer project, was held on July 2nd in Catholic Kichijoji Church in Tokyo. The theme of the lecture was “Interpretation of the confusing situation of Middle East”. The contents were as follows.

We expected that peace negotiations between Israel and Palestine would be progressed after the autonomy agreement (Oslo Agreement) in 1993. However, the negotiations are suspended and we have now almost no news about them.

In the Oslo Agreement, they decided to proceed the peace negotiations creating for a start Palestinian autonomy area in the West Bank and Gaza occupied by Israel in 1967, during the so-called “6 Days War”. Its final goal was “coexistence” of both Israel and Palestine. But negotiations were often interrupted by mutual distrust and violence. Unfortunately, Israeli Prime Minister Mr. Rabin, who had been positive in the peace negotiations, was assassinated, in November 1995, by an extreme rightist Jew. Since then, the tide of peace

negotiations changed. The negotiations were resumed in September 2010 through Mr. Obama, the President of the United States. However, it was not followed because Israel did not accept freezing of settlement activities in the West Bank. Mr. Trump, the new President of United States, showed in February an attitude not to stick to the Two Countries Solution. We do not know if he has a clear peace strategy since he is always on Israeli side: for instance he doesn't object basically to the settlement activities.

According to recent poll results, more than 60% of Israeli people answered that "the West Bank is not an occupied land". The postwar generation born after 1967 believe the West Bank was originally Israeli land because they never learn that it was occupied by the war. Moreover, the tendency that "the current situation is OK" is spread on Israeli side

since the terrorisms are certainly decreasing because of the wall built on the border with Palestine. I am afraid that the hope of peace is loosing.

What should we do to move on the peace process? First of all, we have to stop the violence. We need also to revive the "2 states Solution". Then we have to set a framework for peace other than that of Oslo Agreement. And until then, we need to freeze the current situation such as expansion of the colonies. It is important to build confidence at the citizen level of both sides to move on the peace process again. In this sense, an activity like that of "Helping Children in the Holy Land" is meaningful even if it is very long way to reach the goal of peace.

About the lecturer, Nobuhisa Degawa

He entered NHK in 1985, experienced the directors of Teheran branch (1991-92), Jerusalem branch (94-98), and Cairo branch (2002-06), and currently serves as a commentator on topics related to Middle East, Africa, and Islam.

イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい

7月17日、東京・四谷の幼きイエス会ニコラ・バレ修道院にて『イスラエル・パレスチナ・日本 友好のつどい』を開催した。約70名の方が参加していただき、広々とした明るいホールで、とても和気あいあいとした楽しいイベントになった。

事務局によるプロジェクトの紹介で幅広い支援を呼びかけたあと、第1部では出口誠ジャズメッセンジャーズのピアノトリオのコンサート、第2部では、東京・神田『アルディワン』のアラブ料理ビュッフェが供され、出席して下さった方々の楽しい交流のひとつであった。イスラエル・パレスチナグッズのバザー・コーナーもあり、エキゾチックな暮らしに思いを馳せていただく機会となった。

Israel, Palestine, and Japan Friendship Party

On July 17, we held an event "Israel, Palestine, and Japan of friendship" at Nicolas Barré Hall in Yotsuya, Tokyo, as a means of project advertisement and fund raising. With more than 70 guests in a bright and spacious hall, the event turned out to be really cheerful and successful.

At first, one of the past participants of the summer project delivered a presentation about the project contents, and encouraged for a greater support.

The following program was a beautiful live concert by Makoto Deguchi Jazz Messengers. The second part was a buffet of Arab cuisine catered from Al Diwan, Azabu, Tokyo. The guests seemed to enjoy the exotic taste of the Middle East. Also, we held a bazar selling products from Israel and Palestine, which added a more exotic atmosphere to the event.



東京四谷のニコラ・バレ修道院でのチャリティー・イベント
Charity Event "Friendship Party between Israel, Palestine and Japan"

4 プロジェクトの経過 Daily Reports of the Project

第一部 広島での活動 8月4日(金)～7日(月)

8月4日(金)

午前：イスラエル・パレスチナの参加者がテルアビブから関西空港に到着。JRと新幹線を使って広島へ移動。

午後：広島駅で日本の学生・スタッフと合流。宿舎となるカトリック観音町教会へ。オリエンテーション後、広島平和記念館訪問。

8月6日(日)

午前：広島平和記念式典に参加。被爆者の話を傾聴。

午後：ANT-Hiroshimaの助けを得ながら、ランチ、小休憩、ワークショップ、分かち合い。被爆樹木見学。

夜： 灯籠流し。

8月5日(土)

午前：「平和のための祈りのつどい」広島女学院チャペルにて、他大学学生と。ヤクープがパイプオルガンを弾き、イスラエル・パレスチナ・日本の若者一人ずつが、「平和のメッセージ」を述べた。

午後：ミュージカル「I PRAY」鑑賞。平和行進参加。オリエンテーションとアイスブレイキング。

8月7日(月)

午前：台風で遊覧船が欠航したため、宮島行きを中止。午後乗るはずの名古屋、長野間のJR線が運休のニュースで、急いで広島駅へ。

午後：広島駅から新幹線で、東京を經由して長野へ。善光寺玄證院に22時近くに到着。



広島女学院大学 聖歌隊の合唱
Choir of Hiroshima Jogakuin University



広島での体験の分かち合い
Sharing of the experiences in Hiroshima



被爆者の話を聴く
Listening to the experiences of a A-bomb victim

第二部 長野での活動 8月8日(火)～13日(日)

8月8日(火)

- 午前：ワークショップ 自己紹介、広島での体験の分かち合い。
- 午後：ワークショップ プロジェクトの目的の確認作業(3グループに分かれて) 全体発表、ダンス練習。
- 夜：フリータイム

8月9日(水)

- 早朝：善光寺のお勤め見学
- 午前：日本文化の体験の一つとして、禅の手ほどきを受ける。
- 午後：イスラエルとパレスチナのメンバーはホームステイ先へ。ほとんどの日本人メンバーは善光寺玄證院に残る。



早朝のお勤めのと、信州善光寺本堂前での集合写真
In front of the main temple of ZENKOJI after the morning prayer, with Rev. Kiwa Fukushima

8月10日(木)

- 午前：ホームステイ先からボランティアセンターに集合、ダンス練習。
- 午後：ワークショップ ホストファミリーでの素晴らしい体験の分かち合い。ダンス練習。
- 夜：ダンス練習、翌日のイベント「平和の架け橋交流会」準備。

8月11日(金)

- 午前：イベント「平和の架け橋交流会」の準備：ダンスの練習および中東料理の準備。
- 午後：「平和の架け橋交流会」開催：参加者約80名
- 1) 挨拶とプロジェクトの紹介
 - 2) 文化交流：3カ国伝統の歌とダンスを披露。地元のコーラス「カント・キアラ」、ハンドベル・グループやゴスペル・グループも参加して下さった。
 - 3) 料理提供：プロジェクト参加者がつくった中東料理を提供し、喜んでいただいた。
- 夜：フリータイム。

8月12日(土)

- 午前：ボランティアや子どもたちと飯縄高原へ。イワナ釣りやバーベキューを楽しむ。
- 午後：分かち合い「紛争の個人的体験」
- 夜：ワークショップ それぞれが分かち合ったことに関する対話。その結果「平和の架け橋」を築くということを全員で再確認。

8月13日(日)

午前：ワークショップ 前夜の紛争に関する対話の続き

午後：ワークショップ 「どのように平和の架け橋を築くか」具体的な方法は? (3グループに分かれて) 三菱UFJ国際財団、岡花 耕氏による視察

夜：善光寺玄証院の掃除・整頓と移動準備



写真上 禅の初体験
写真下 長野での最後のワークショップ後の集合写真
Upper: First experience of ZEN
Lower: After the last workshop in Nagano

第三部 東京での活動 8月14日(月)～17日(木)

8月14日(月)

午前：高速バスで長野から東京へ移動。

午後：東京に到着。JICA にチェックイン、オリエンテーション後、フリータイム。東京観光。



ワークショップの一コマ (JICAにて)
A scene of workshop (at JICA)

8月15日(火)

午前：ワークショップ

- 1) 長野での活動の振り返りと分かち合い、信頼ゲーム。
- 2) プロジェクト全体の振り返りと反省、良かった点、改善点なども含めて。

午後：サバイバルゲーム 3グループに分かれて実施。命の危険に遭遇した時、どのように助け合って生き残れるか。

ワークショップ イスラエル・パレスチナ紛争の解決策について「二国家共存」は可能か。

夜：フリータイム

グループとして、個人として達成できたか。「絆」ゲーム プロジェクトの集大成として、互いの友情の絆、感謝の気持ちをかたちにする。

午後：ワークショップ：「平和宣言」の作成。

まず各自が、このプロジェクトの誇りとして何を決意するかを考察。その後3つのグループ、次に全体で、宣言文を作成。各自の感想、決意文作成。

夕食：フェアウェルパーティー (ゆかた姿で新宿へ)

8月16日(水)

午前：ワークショップ このプロジェクトの目標を

8月17日(木)

午前：プロジェクト終了、解散。その後、終日自由行動。

Daily Reports of the project

Part One : Activities in Hiroshima / Aug. 4 ~ 7

Friday, Aug. 4

AM : Israeli and Palestinian participants arrived at Kansai Airport from Tel Aviv, traveled from Osaka to Hiroshima by JR line and Shinkansen.

PM : Arrived at Hirhosima Station, met Japanese participants and staff. They moved to Kannon-machi Church, offered by Catholic Hiroshima Diocese as accommodation. After orientation, visited Hiroshima Peace Memorial Museum.

Saturday, Aug. 5

AM : Attended to "Prayer Service for Peace" at Hiroshima Jogakuin University with other students from several Universities. Ya'coub played a pipe organ. Each representative of Israeli, Palestinian and Japanese participants presented his message for peace.

PM : Watched a musical "I Pray" played by children. Attended a Peace Walk.

Orientation and icebreaking.

Sunday, Aug. 6

AM : Attended Hiroshima Peace Memorial Ceremony. Attended to a Lecture by A-bomb victims and listened to their experiences.

PM : Thanks to NPO ANT-Hishosima, had a lunch and break time, workshop and sharing. Went to see A-bombed trees.

Evening : Toronagashi (memorial service for the victims of A-bomb, floating paper lanterns lighted with candles on the river)

Monday, Aug. 7

AM : Canceled to go to Miyajima. Went to the Hiroshima Station in a hurry because of the announcement of cancellation of the train between Nagoya and Nagano. Obligated like this to change our program due to the approach of the strong typhoon No. 5.

PM : Traveled from Hiroshima to Nagano via Tokyo by Shinkansen. Arrived at Zenkoji, Genshojin around 10 p.m.

Part Two : Activities in Nagano / Aug. 8 ~ 13

Tuesday, Aug. 8

AM : Workshop – Self-introduction, sharing about the experiences at Hiroshima.

PM : Workshop – Confirming and remembering the aim of this project in 3 groups. Each group reported the results in a general meeting.

Practice of dancing.

Evening : Free time

Wednesday, Aug. 9

Early Morning : Participated to the Prayer Service of Zenkoji.

AM : Experienced Zazen (Zen meditation).

PM : Israeli and Palestinian participants went to their respective host families. Almost all the Japanese stayed at Genshojin.

Thursday, Aug. 10

AM : Went to the Volunteer Center returning from the host families. Practice of dancing.

PM : Workshop – Sharing – "The experiences of home stay." Practice of dancing.

Evening : Practice of dancing.

Prepared for "Peace Bridge Symposium" the next day.

Friday, Aug. 11

AM : Prepared for "Peace Bridge Symposium" in Nagano – Practiced to dancing and prepared Middle Eastern cuisine.

PM : "Peace Bridge Cultural Exchange" – Approximately 80 participants attended.

1) Opening speech and presentation of the "Peace Bridge Project".

2) Cultural exchange: Performance of traditional songs and dances from the three countries. A local chorus group "Canto Chiara," a hand-bell choir, and a gospel choir also participated.

3) A buffet of Middle Eastern cuisine: Offered Middle Eastern cuisine cooked by the project participants. The guests enjoyed it a lot.

Evening : Free time.



長野の飯縄高原でバーベキュー後、子どもたちやボランティアの方々とともに
At Iizuna Highland, Nagano, a photo with the children and the volunteers after the barbecue.

Saturday, Aug. 12

AM : Excursion to Iizuna Highland with local volunteers and children. Experienced mountain trout fishing. Enjoyed very much fishing at a pond barbecue in the beautiful nature and with the children.

PM : Sharing – “Personal Experiences of the Conflict.”

Evening : Dialogue on the sharing of the morning to understand better each other and to renew their resolution to build a peace bridge.

Sunday, Aug. 13

AM : Workshop – Discussion on the Conflict between Israel and Palestine

PM : Workshop – Discussion in 3 groups, “How to build concretely a Peace Bridge?”

Mr. Ko Okabana, staff of Mitsubishi UFJ Foundation was present.

Evening : Cleaning Zenkoji Gensho-in and packing up.

Part Three : Activities in Tokyo / Aug. 14 ~ 17

Monday, Aug. 14

AM : Travelled to Tokyo from Nagano by bus.

PM : Arrived in Tokyo. After check-in to JICA and

orientation, the participants had a free time to explore Tokyo.

Tuesday, Aug. 15

AM : Workshop – Sharing “Experiences of activities at Nagano.”

Trust Game.

Looking back on the whole project.

PM : Icebreaking – Survival game.

Workshop – “Have the aim of this project been accomplished as group and for yourself?”

Wednesday, Aug. 16

AM : Played Kizuna Game: as the grand sum of the project, this game made their mutual friendship and appreciations “visible”.

PM : Workshop – Drawing up the Declaration of Peace. At first, participants individually pondered their resolutions from the project, and then, discussed about the individual resolutions in 3 groups, and finally, drafted a declaration for peace as a whole group. Finally, they wrote personal report of this project.

Dinner : Farewell party

Thursday, Aug. 17

Morning : End of the project and dismissal. Free time for the rest of the day.

5 収支決算 Balance Sheet

プロジェクト会計報告 (2017年4月～9月) Project Financial Report (April - September 2017)

収入の部 Revenues

単位:円 Unit: ¥

費目 Items	摘要 Descriptions	金額 Amount	
支援金等 Contributions, etc.	一般寄付金 Private donation	1,276,200	3,255,592
	助成金 三菱 UFJ 国際財団 Subsidies by Mitsubishi UFJ Foundation	700,000	
	イベント収入 (講演会、チャリティー・イベント) Charity event participation fees (Total)	672,350	
	参加費 学生、スタッフ、他 Project participation fees (students, staff)	1,416,483	
自己資金 Own funds			339,779
合計 Total			4,404,812

支出の部 Expenditures

単位:円 Unit: ¥

費目 Items		摘要 Descriptions	金額 Amount	
旅費 Travel expenses	国内旅費 Domestic travel expenses	交通費 (列車、夜行バス、レンタカー他) Transportation (Shinkansen & train fare, rent-a-car and other travel expenses)	408,349	2,882,222
		滞在費 (宿泊費・食費など) Accommodation (Lodging・Meals)	661,253	
	海外旅費 Overseas travel expenses	航空券代 テルアビブ～成田 Roundtrip travel expenses Tel Aviv ~ Narita	1,812,620	
人件費 Personnel expenses		事務運営費、イスラエル・パレスチナ事前準備費 Administrative expenses, Preparation in Israel / Palestine	676,400	756,400
		謝礼 Reward	80,000	
会議費 Conference expenses		施設使用料 Rental fee of seminar rooms & halls	80,292	147,955
		交流イベント、フェアウェルパーティー Event fee, Farewell Party	67,663	
印刷・複写・製本費 Print / Copy / Bookbinding		パンフレット・しおり、コピー、報告書作成 Leaflets, brochures and booklets, Making report book	96,000	96,000
通信・運搬費 Communications / Delivery		通信費・宅急便代、報告書発送 Communications / delivery, Report shipment	30,762	30,762
消耗品費 Consumables		各種生活雑貨、Tシャツなど Groceries, T-shirts	134,698	134,698
雑費 Miscellaneous expenses		振込手数料、その他 Transfer fees, Others	6,775	6,775
イベント費 Event expenses		講演会、チャリティー・イベント Charity events and seminar expenses	350,000	350,000
合計 Total				4,404,812

6

参加者の声

Feedback from the Participants

青年参加者の声 / Voices of the Young Participants



イゴール・セミヨノフ Igor SEMYONOV

●イスラエル 25歳

●Israeli 25 years old

情報セキュリティコンサルタント

Information Security Consultant

「平和の架け橋 in ヒロシマ」に参加し、参加者の文化の違いや意見の違いがもとで、多くの論争や問題が出てくると予想していた。私はいつも、皆が私に賛成するかどうかに関わらず、自分の考えや気持ちを理解してもらうことを期待し、もし私が反対だと

しても、皆の意見も理解するよう努力した。

私たちが感じていることを、常にすべて話せる訳ではなかったのに、ほとんどの参加者が私と同じような気持ちでいたことに驚いたが、嬉しかった。私たちは、丁寧かつ前向きな態度で議論し、交流するよう努めた。

私たちはいろいろな所から来たいろいろな方々と交流できた。長野の善光寺では僧侶たちの生活をかいま見、禅の瞑想の手ほどきも受けた。広島では平和記念式典にも出席し、首相のスピーチを聞き、被爆者たちの話しも聴くことができた。

プロジェクトを通し、数多くの障害や困難に直面したが、それらを参加者たちと、礼儀正しく、丁寧な方法で乗り越えることができた。

プロジェクトのお陰で、とくにデリケートなテーマに取り組んでいる時に、互いに理解しあう方法が向

上したと思う。そのことで、私の紛争に関する知識が豊かになり、いくつか新しい意見を持てるようになった。

様々な異なる文化の人々と、一緒に暮らしたり、対話したりすることが、本当に貴重な経験であることがわかった。今回得た知識を維持し、紛争に関わる人々だけでなく、自分と関わりある人々の様々な人生の背景、気持ち、考え方を深く理解できるようになることを望んでいる。

I anticipated to have many conflicts and issues due to the cultural differences and opinions of every participant by joining the "Let's Make a Peace Bridge in Hiroshima 2017".

I always expect people to understand my ideas and my state of mind, of whether or not they agree with me, just as I attempt to understand every opinion even if I disagree.

I was pleasantly surprised to find that most participants have a similar state of minds and even if we couldn't always say everything we felt. We managed to discuss and communicate in a respectful and productive manner.

We have communicated with many different people from different communities – In Nagano, we saw the Buddhist lifestyle of monks in the Zenkoji Temple and experienced Zen meditation.

In Hiroshima, we attended the Peace Ceremony, listened to the Prime Minister's speech and conversed with survivors of the A-Bomb disaster.

Throughout the project we encountered numerous obstacles and difficulties, and found ways to overcome them together in a polite and respectful manner.

The project has helped me to improve the way I communicate with people especially when addressing sensitive subjects. It has enriched my

knowledge about the conflict and has provided several new opinions and points of view.

Living and conversing with people of various different cultures has been truly proved to be a priceless experience. I hope to maintain my knowledge and to gain a deeper understanding of the backgrounds, states of minds and points of view of people not only regarding the conflict, but also people who have any aspect of life we have interest in.

ダナ・マガル Dana MAGAL

●イスラエル 23歳 大学生
●Israeli 23 years old Student (Medecine)

私は、異なる文化を理解するため、そして中東の紛争について学ぶために、“平和の架け橋プロジェクト in ヒロシマ”に参加した。新しい友人に出会い、紛争についてより理解したいと望んでいたが、期待通りだったことを嬉しく思う。共同生活を通じ、料理やダンス、共に楽しい時間を過ごす中で、異なる環境で育っていても、友人になることが出来た。様々な意見や個人的な話を共有し、紛争について多くのことを学び、知識を深めることができた。事実、歴史を知り、紛争について広い視野を持つことは、状況を客観的に分析するために、とても重要だ。この点において、私は、プロジェクトは成功したと思う。

さらに、このプロジェクトは互いを尊重することも大切にしていた。私たちは、繊細な問題について難しい議論をしたが、その結果、相手の立場を理解するには、互いを尊重することが基本原則だと分かった。このプロジェクトを機に、私は、人々の中にある誤解をとき、平和の大切さを伝えていきたい。

広島訪問は、和解の大切さを教えてくれた。私たちは「忘れる」ことではなく「許す」ということを学ばなければならない。お寺で仏教の祈りに参加し、日本文化を体験できたことが楽しかった。特に、ホストファミリーと過ごした時間は、忘れがたい経験となった。

紛争は見た目以上に複雑で、双方が満足できる解決方法などないかも知れないとわかっているが、平和は成し遂げられると信じたい。

この素晴らしいプロジェクトに関わったすべての

方々、真の友人となった参加者の皆様、スタッフの皆様にも、感謝したい。

I joined the project "Let's make a peace bridge in Hiroshima" to get to know different cultures and learn more about the conflict in the Middle East. I was hoping to meet new friends and to reach for a better understanding regarding the conflict. I am glad my expectations came true. By experiencing the community life, cooking, dancing and having fun together, we became friends despite our different backgrounds. I have learned a lot about the conflict and developed my knowledge through sharing various points of view and personal stories. I believe it is crucial to be aware of facts, history and the bigger picture of the conflict in order to examine the situation in an objective way. In my opinion, the project was successful in this matter.

In addition, the project was focused on mutual respect. We had occasion to share some difficult discussions regarding sensitive issues. And we found that mutual respect has been an essential principle for understanding the other side. I am certain that after this project I can help to clear up misunderstanding among the people and I will do my best to spread the importance of peace among my friends.

Visiting Hiroshima taught us the importance of reconciliation. We should learn how to forgive but



not to forget. I enjoyed experiencing the Japanese culture by participating in a Buddhist prayer. Moreover, spending time with my host family has been an unforgettable experience.

Despite our understanding that the conflict is more complex than what it seemed and that there

might not be a solution that satisfies both sides, I still want to believe peace is achievable.

I would like to thank everyone who took part in this significant project, to the participants that became true friends and the staff members.



バシヤ・クリチカー Basya KRITHCKER

●イスラエル 23歳 大学生
●Israeli 23 years old University Student

私は、議論を通して状況をより理解し、平和を作るグループとなって、平和への一步を踏み出せると期待していた。グループのメンバーがどんどん近づくことを願っていた。イスラエル、パレスチナ間の状況が変わり、仲良く暮らせることを願った。もちろん、そんな

ことは2週間では起こるべくもないが、私たち参加者みんな、イスラエル人もパレスチナ人もそして日本人も、多様性の中でも、共存し、仲良く暮らせると思った。

このプロジェクトのおかげで、私はパレスチナの人々が、どのように感じ、どのように過ごしてきたのかを、より理解することができた。心を開くこと、思いやりをもつこと、彼らと本当の友人になることを学んだ。一緒に寝起きし、食事や掃除を共にすることで、お互いにより深く繋がることができた。同じ困難に直面し、それを乗り越えて、より親しくなり、団結することができた。心が通じ、良いコミュニケーションをとることができた経験をふまえ、平和は達成できるものと信じている。

まず、パレスチナ人、日本人、両方の新しい友人たちとずっと連絡を取り合うことがとても大切だと思う。今回のプロジェクトで私が経験したこと、学んだことを、世界中の知人にも知ってもらおうと思う。私たちは、歩み寄り、寛容になり、相手を尊重することを学ぶ必要がある。

出来る限り早く、イスラエル人とパレスチナ人に平和が訪れることを願う。また、これ以上、罪の無い

人々が紛争によって傷つけられることがないように、幸せに、当たり前、平和に暮らせるようになることを願う。人々が、平和のために尽力するようになり、平和を作るグループが成長していくことを祈る。少しずつでも、ゴールに近づくことができるだろう。

I expected to achieve a better understanding of the situation through discussions and to become a group of peace builders and to start taking first step towards peace. I hoped our group members became closer and closer. I also hoped that the current situation between Israeli and Palestinians would be changed, and that we could live in harmony. Obviously, it couldn't happen in two weeks, but I absolutely knew that we, the participants, Israeli, Palestinian and also Japanese could co-exist and live in harmony together, despite our diversities.

Thanks to this project, I was able to understand better the Palestinian side, how they feel and what they've been through. I have learned to be open minded and considerate, and to build a true friendship with them. Sleeping, eating and cleaning together helped us to connect better each other. Facing the same difficulties and struggling them made us being closer and more united. All these experiences showed me that we could genuinely become connected and have a good communication. That means peace is achievable.

First of all, it is very important for me to keep in touch with my new friend, both the Palestinians and the Japanese, and will spread what I have been through and learned in this project to everyone in the world whom I know. We need to

learn to compromise, to be tolerant and to respect the other side. I will introduce this kind of project to other people and will talk about this project to them.

I hope that peace comes to Israeli and Palestinians as soon as possible. I also hope no

more innocent people will get hurt from this conflict, and could live a happy, normal and peaceful life. I wish people make effort to promote peace more and more so that the group of peace builders will grow as much as possible. We will be able to reach our goals step by step.

モラン・クナフォ Moran KNAFO

●イスラエル 24歳 会社秘書
●Israeli 24 years old Secretary

プロジェクト以前は、新しい友人と出会い、紛争に対する考え方や紛争が人々の日常にどのように影響しているか、学ぶことができると期待していた。事実、個人的には大きな視野を掴むことができ、平和を目指し一歩前進することができた。自分の目標のほとんど、それ以上のことを達成できたと感じている。素晴らしい人々と出会い、私たちの日常の状況や歴史について、相手を尊重しながら議論ができた。パレスチナ人の生き方や習慣を理解すること、友情を築くこと、心を開くことなど、期待以上に多くのことを学んだ。家に帰ったら、学んだことすべてを、周囲の人たちと共有したい。

プロジェクトで様々な話を聞いたり、共有したりする中で、それぞれの生活や、彼らがどのように物事を見ているか、困難をどのように生きているのかを学んだ。争いの背景には、たくさん原因がある。みんなに自分の考えを知ってもらうため、過激派の政府やその他の事情にも影響されない、大きくて現実的なイメージを描くため、私自身の体験も共有した。このようにして、私はだんだんと複雑な状況を理解するようになり、頭を働かせて解決策を見出そうとするようになった。ほんの少しでも変化をもたらす方法を探し出そうとした。今後、私に出来る最善の事は、互いに理解し、平和を願うために、他の人たちから学んだことを、広げていくこと。紛争に関する人々の考えを変え、小さな一歩でも、前へ踏み出し、平和へ近づいていくことだ。

将来いつか、私たちみんなが平和に暮らせることを望んでいる。困難を乗り越え、成長し、これ以上被害者が出ないこと、憎しみが生まれえないこと、制限がないこと、痛みがないことを望んでいる。そ

していつの日か私たちみんなが、自由になれることだけを望んでいる。

Before the project, I expected to meet new people and to learn about their point of view on the conflict and how the conflict affects their daily life. In fact, I could understand the bigger picture better and get one step closer towards peace as a personal achievement. I feel that I have achieved most of my goal and more. I met wonderful people and we managed to have a great respectful discussion about the situation, the history and our daily life. I have learned much more than I expected, such as the Palestinian way of life and costumes, building friendships, and opening my heart, etc. I would share it all with my surroundings when I get back home.

In the project by listening to and sharing stories, I've learned about life on the other side, how they see things and how they live their difficulties. There are many reasons behind struggles. I've shared my stories to let everyone know my perspective and to manage to create a bigger picture, a real picture, that is not affected by the radical governments and etc... This allowed me to understand the complexity of the situation and really work my mind and try to figure out a solution or at least a way to make a change even a small one.

My plans are to do my best to spread what I have learned among everybody, to tell the stories about the mutual understanding and mutual hope for peace. I would like to try and make a difference in people's point of view on the conflict, and to try to



get one step more, even a small one, to be closer towards peace.

I hope that someday in the future, we all live in peace. I hope we'll manage to grow and overcome

our differences, I hope there will be no more victims, no more hate, no more limitation, no more pain. I hope that one day we could all just be free.



ジャック・ダーダル Jack DAHDAL

● パレスチナ 20歳 大学生
● Palestinian 20 years old University Student

平和の架け橋プロジェクト 2017 は、2回目の参加となる。1回目は 2015 年の夏だった。私は、パレスチナグループのリーダーに選ばれた。若いリーダーとして、グループの強化をはかり、より良きものにするという責任を持つことは大変な仕事であったにもかかわらず、私にはプロジェクトのすべての時

間楽しかった。それはその責任のおかげで、私は人間としても成長したからである。その上、グループとして互いに信じあう新しい関係を築き、友情関係を保つどころか、強くさせてくれた。(弘子とヤクーブに信頼されて) リーダーになったことで、スタッフや参加者から頼りにされ、私たちみんなの架け橋になれたと思う。

このプロジェクトに2度目に参加したことにより、私の国での平和構築のためにさらなる努力をする責任が自分にかかっていると気づかされた。私は、このようなとても重要なプロジェクトには、パレスチナの多くの若者が参加する機会を持つべきだと思う。何回参加していても、常に新しいことを学び、相互の尊敬や信頼を学ぶからである。プロジェクトではいつも、参加者がそれぞれ異なる文化的社会的背景を持っているとしても、互いを尊重し、理解し、受け入れ合うよう努力した。明るく楽しい雰囲気を創り出すためである。それはとても有意義な方法であった。私にとっては、前回の 2015 年のプロジェクトより今年のプロジェクトの方が良かったと思う。意見を共有し、議論する中で見られた、相手を尊重する姿勢は素晴らしかった。参加者の間に結ばれた友情の絆のおかげで、家から遠く離れたところではなく、友人や家族と共に過ごしているように感じることで

きた。

素晴らしい2週間の間、私はたくさんのことを学ぶことができた。例えば、広島について、原爆がどのように人々に影響したか、人々はどのように灰から立ち上がり、町をより美しく、より強く再建したかを見た。現在は平和の象徴とされる広島の未来の世代は、幸せに暮らすことができるだろう。私はまた、広島の恐ろしい悲劇と平和の架け橋プロジェクトから、私たちこそパレスチナの地域に平和を広げる使命を持っていることも学んだ。このプロジェクトで得た知識や経験を、友人や家族と共有し、少しずつ、皆の心に平和の種を植え付けることができるだろう。

Peace Bridge Project 2017 is the second project I participate in, the first time being in the summer of 2015. This time I was chosen as the leader of the Palestinian group. As a young leader it was a tough job to take the responsibility to maintain the group to be a good and strong one. Nevertheless I could enjoy every moment of the project. Thanks to this responsibility, I could develop my personality and my way of thinking and becoming productive. Moreover, the project helped us to build a new level of trust between us as a group, to maintain the friendship and even to strengthen them. I think being a leader (with the trust of Hiroko and Yacoub) earned the respect of the staff and everybody to be a bridge between us all.

This opportunity to take part of the project once again made me realize better my duty to commit myself more and more to carry on peace building in my country. I believe many Palestinian youths should have the same opportunity as I had: participation in such an important project. Regardless of how many times you participate, you will be constantly learning new things. No matter

which culture or which background you come from, the mutual respect and happy atmosphere made the project so productive.

In my opinion, the project in 2017 was better than the previous project in 2015. The respect showed in sharing and discussing was great, the good feelings given by the participants made you feel like you're not away from home, but you're actually home among your friends and family.

During these amazing two weeks, I have learned a lot. For example, about the A-bomb in Hiroshima, I have seen how it affected the people and how they were able to rise from the ashes and rebuild this city into a better and stronger one. I believe the future generations will be able to live peacefully in Hiroshima which is currently

representing peace. I have also learned from this horrible tragedy and the peace project to carry on with this mission of spreading peace to my own community in Palestine, sharing with my friends and family my knowledge and experience gained in the project. And step by step, we can plant the seed of peace in everybody's hearts.

We are very happy to have participated to this project and to have achieved its purpose. I think all the activities, specially the group workshops, helped us to achieve our purpose. I'm sure that we will keep in touch with each other through the SNS group that we created for ourselves.

Every moment in this experience will be remembered forever.

イツゼディン・ダジャニ Izzeddin DAJANI

● パレスチナ 21歳 大学生
● Palestinian 21 years old University Student

日本に来る前は、私たちパレスチナ人とイスラエル人の間にはあまり共通点がないと思っていた。しかし日本人スタッフや参加者と出会ってみると、思った以上に、私たちは多くのものを共有していることがわかった。それは、私たちの中東文化と極東文化がどれほど異なっているかを見たからだろう。その結果イスラエル人参加者との関係が固いものとなり、さらには共に日本文化に適応し、日本文化を尊重しようと努力した。文化の多様性からくる衝突がいくつかあったものの、グループ全体の良い雰囲気によって、これらの問題を乗り越えられたと思うし、このようなプロジェクトの中で最良のグループの一つになれたと思う。

このプロジェクトで私たちが得たものは、思いやりの心だと感じている。異なる文化、信仰と背景を持つ人たちと暮らし、交流しなければならなかったからだ。このことで、互いに生涯の友情関係を作り上げることができた。さらに、議論やワークショップの間、誰からも邪魔されることなく、敬意をもって、しかし自由に自分自身を表現する機会があり、皆に意見を聞いてもらい、理解してもらうことができた。一方で、他者の話を聞くことで、自分の知識の限界を広げることができ、新たなことを学び、私たち皆が紛争の被害者なのだと信じることができた。

私は、自国の友人に現在の状況をより良く理解してもらうために、日本で経験したことを伝えたい。また、今回の参加者を通じて繋がりを広げていき、イスラエル人、日本人、パレスチナ人との間に良いネットワークを作り、より明るい未来を構築するために、私たちの経験を実り多いものにした。

今の残酷な世界で完全な平和を目指すことは難しいが、私は若者として私の内面から、また家族や地域社会から、小さな一歩を始めていく義務があると感じる。私たちは思想や、民族、ジェンダーによる差別なく共存すべきであり、より豊かな世代を目指して平和な世界をつくるべきだと思っている。

Before coming to Japan, I thought that we (Palestinians and Israelis) do not have a lot in common. However, after I met the Japanese staff and participants, I figured out that we share a lot more than I have expected. The reason behind that is that our culture in the Middle East is more



different than the culture in the Fareast. This resulted in strengthening our relations with the Israeli participants and trying to adapt and respect the Japanese culture. I can say that we had some cultural conflicts. But I think the overall atmosphere of the group made us overcome these problems and become one of the best groups in this kind of projects.

In my opinion what we got in this project is a kindness since we had to live and interact with individuals with different cultures and beliefs and backgrounds. This also allowed us to make lifelong friendships each other. Moreover, during the discussions and workshops, I had the chance to express myself respectfully and freely without any interruption that resulted in being heard and understood my point of view by everyone. On the other hand, by listening to the others, I was able to

expand my limitation of knowledge and learn new things and believe that we are all victims of one conflict.

I will reflect my experience here in Japan with my friends back home to provide a better understanding of the current situation. I also want to keep our friendship and try to expand my connections throughout the participants to have a better network between Israelis, Japanese and Palestinians to collaborate and benefit from our experiences for a bright future.

It is quite hard to achieve absolute peace in this cruel world but I feel obligated as a youngster to start with small steps, such as my inner, family and community peace. In my opinion, I think that we should coexist without any ideological, racial and gender limitations and build a peaceful world for a productive generation.



ジョージ・タドロス George TADROS

●パレスチナ 19歳

● Palestinian 19 years old

大学生

University Student

日本に来る前、このプロジェクト「平和の架け橋 in ヒロシマ 2017」に参加することで、異なる視点を持てるようになり、私が生まれ育った地域の紛争を違う立場の目から見ることができるようになるかと予想していた。実際には、それだけでなく、他にたくさんの新しいことを学ぶことができた。そしてどちらか一方ではなく、双方のことを、深く理解することができた。私たちの紛争について、議論し、知識を広めたことは、物事をみる方法として、興味深く、美しいとすら感じた。

このプロジェクトは、私の期待以上のものを与えてくれた。視野を広げてくれたし、いろいろなことを理解させてくれた。また、異なる立場の人を受け入れられるようになった。その上、みんなと友人になることもできた。私たちがみんな同じ人間であることも確信できた。これらは、プロジェクトの様々な活動、ワークショップ、お祈りを通して、養われた。

このプロジェクトで、善光寺や多くの美しい建物の

見学(大学で建築を専攻しているため、特に興味深かった)、プロジェクト参加者との共同生活、広島平和記念資料館を訪問したことなど、多くの楽しい体験をした。広島は、灰からバラに変わった町で、前向きに苦しみを乗り越えてきたことがわかり、とても興味深かった。今日の広島は、素晴らしい町になっている。そのことが、私たちの未来に希望を与えてくれていると強く思う。

私は、人々が壁ではなく橋をかけてくれること、また相手のことを、たとえ肌の色や宗教、国が異なっても、みんな同じ人間、平等の権利を持つ人間だと思ってくれることを望んでいる。

My prospective before coming to Japan was to have the ability to look through different perspectives and to see the conflict that I was born in and lived with through my entire life, from the eyes from the different side in this project " Let's make a Peace Bridge in Hiroshima 2017 ". I actually achieved not only that purpose, but also some other abilities. I could have a deep and sentimental

understanding of both sides, not just one. That was very interesting and beautiful way of seeing things for me because it allowed me to take part in the discussions and widened my knowledge about our conflict.

This project has given me something I did not expect. It made me open my eyes and understand things in general. It also changed my personality and the accepted level to see so much that I could understand and accept the other side, Israelis. I became even friends with them instead and we could convinced ourselves as the same human beings, not different. All of that has been developed by communication through different activities, as workshops and spiritual prayers.

In this Project, I experienced many interesting

activities such as living the community life with the participants of the project or visiting the Zenkoji Temple where I saw many beautiful and traditional buildings : I was particularly happy because my major study at the university is architecture. It was also very touching to visit Hiroshima Peace Memorial Museum because saw that this city has turned to roses from ashes and has overcome her pain in order to take a positive direction. Hiroshima is today a great city and gives me a sense of hope for our future and especially mine.

I hope that people would start to believe in building bridges, not walls, and to consider that all the people are the same human beings with equal rights, and not different because of colors, religions, or countries.

タリーヌ・ラマ Taline LAMA

●パレスチナ 27歳 建築士
● Palestinian 27 years old Civil building and architectural engineer

「平和の架け橋 in ヒロシマ 2017」に参加できたことは、本当に嬉しく感謝している。自分の意見を口に出して率直に話し、他の人の考え方を理解する機会を与えてもらえる今回のようなプロジェクトに参加したいと、以前から思っていた。自分の国ではこのような機会は持てない。私たちイスラエル人とパレスチナ人は、日本という第三国で日本人とともに生活したからこそ自由に話し合うことができた。私もまた、残念ながら今暮らしているパレスチナ、ラマラでの紛争体験を自由に話せた。

個人としては、世界の平和を実現したくても、大きなことはできないと分かっているが、平和のメッセージを広められる同じようなプロジェクトに参加し、人々の暮らしの多様性について理解する機会を与えるような、小さなことから少しずつ始めていこうと思う。平和の架け橋を築くために手に手を取って働くことは、私たちが大勢であればあるほど、もっと容易になるだろう。

友情の絆や十分な意思疎通、互いに話を聞き、受け入れ合うことは、このプロジェクトの一番重要なことであり、成果であった。異なる国籍、宗教、文化であっても、非常にオープンな心を持っている人たちと出会えたことは、本当に幸運だった。私たちは、

思いを共有し、心からの敬意をもって、他の人の思いを受け入れた。以前は知らなかった、他者の苦しみや、新しいことも学んだ。日本の文化をより深く理解するために、広島での平和式典への出席、善光寺でのお祈り参加など、多くの大切な活動を、皆で一緒に行く機会にも恵まれた。

このプロジェクトから得たものは、「私の希望」となった。「平和は笑顔から始まる」と言われるように、一人ひとりの小さな世界であっても、簡単ないろいろな方法で平和を実現するために働くことができるだろう。もしそうであるなら、笑顔に溢れる世界はすぐ手の届くところにあるのではないだろうか？

I'm really glad and grateful that I had the opportunity to participate in the project "let's make a Peace Bridge project in Hiroshima, 2017". I have been eager to take part in this kind of projects that would give us the chance to speak up my opinions loudly and understand the others' point of view, because we can't have an opportunity



like this in our country. We, Israeli, Palestinians, could talk freely because we were staying and living together with Japanese here in Japan, a third country. Me too, I could share my stories about the conflict in Ramallah in Palestine where I am living unfortunately.

As one person, I know I have no capacity to do much to achieve the peace our world needs, but step by step, I would start with small things such as participating in similar project, spreading a peace message and giving a chance to others to understand the diversity of their way of living. All of us can be peace builders. The more we are, the less it would be difficult to work altogether hand in hand in order to build a peace bridge.

Friendship, good communication, listening and accepting each other were the main key and

achievement of this project. I was really lucky to meet very open-minded people even with our different nationalities, religions and cultures. We shared our thoughts and accepted the others' ones in a really respectful way. We have learned about others' sufferings and new things we did not know about before. We had the chance to do many important activities together, such as attending Hiroshima's Peace Ceremony, and the prayer in Zenkoji. All of them were experiences that taught us more about the Japanese culture.

My hope is what I gained from this project. We still can work and achieve peace even in our small and personal world in many different easy ways as it is said: "Peace begins with a smile". So, if it is like this, can you imagine a world full of smiles?



ロドルフ・サアデ Rodolf SAADEH

●パレスチナ (イスラエル国籍) 20 歳
● Palestinian 20 years old

大学生
University Student

「平和」という言葉を聞くと、私たちは、問題や悩み、紛争などがなく暮らせることを思い浮かべる。しかし実際には、そんなことを実現するのは非常に困難であり、変化を起こしたいのであれば、まず自分自身を変え、それから他の人

たちを変えようとしなければならない。

私たちの体験は、空港でイスラエル人参加者たちと出会ったところから始まった。最初の目的地はアムステルダムで、6時間ほどの待ち時間があり、互いにもっと知り合って緊張をほぐすことができるようアイスブレイキングゲームなどをした。アムステルダムから広島までの12時間のフライトで、すっかり疲れ果ててしまったが、それでも広島平和記念資料館を訪問することができた。原爆とは何かを知り、また広島の人たちが受けた被害の悲惨さを知り、とても心を揺さぶられる時間だった。

私たちは、初めて銭湯に行ったり、座禅を試したり、善光寺を訪問したり、いろいろな体験をした。中でも大切だったことは、ワークショップや対話ができたことだった。こうして私たちは互いを受け入れ合い、

思いやることを学び、イスラエルとパレスチナの現状を更に深く理解できた。

長野のホストファミリーでの素晴らしい思い出は、決して忘れることができない。それは、非日常的で特別な体験で、日本の人々の愛とおもてなしの心を感じた。文化交流のイベントでも、私たちの文化を表現する機会があり、尊敬と愛のしるしとして、日本人の人たちと交流できたことは大きな喜びであった。

私は当初、プロジェクトがどのようなものになるか、分かっていなかったが、幸運にも、この「平和の架け橋 2017」プロジェクトは、私という人間の様々な面を成長させてくれた。もっと心を開いて他の人たちの多様性を受け入れること、他の人たちの意見を尊重することなどである。このプロジェクトはまた私の心に希望の種を蒔いてくれた。おかげで私も平和のメッセージを発信し、平和をつくる人になれるという希望を持つことができた。私の将来の願いは、人々の宗教や肌の色や民族が何であれ、互いに受け入れられる世界になることである。そして、すべての人が互いに同じ人間であると認めることである。それができれば、互いに殺しあうことなく、大切にし、愛し合うことができると思うからである。

When we hear the word "peace", we think about a life without any problems, troubles, and conflicts ...etc. But in fact, to reach this point is so difficult, and if you want to make a change, you should start changing yourself then try to change the others.

Our experiences of the Project have begun when we met the Israeli participants at the airport; the first destination was Amsterdam where we had about 6 hours stop where we tried to break the ice and get to know each other.

We were so exhausted after 12 hours flight from Amsterdam to Hiroshima but it didn't prevent us from going and visiting the museum where we spent very emotional moments regarding to the atomic bomb and how it affected the people of Hiroshima.

We had a lot of experiences such as trying the public bath, the ZEN meditation and visit to the temple of Zenkoji. But the most important thing was having the workshops and the discussions which made us more accepting and being considerate to each other and understanding about the situation in Israel and Palestine etc.

I will never forget the wonderful memory which I had with the host family in Nagano. It was an exceptional and extraordinary experience. I felt love and hospitality of the Japanese people. The cultural exchange event was also a big joy for us because we had a chance to express our culture and exchange it with the Japanese as a way of respect and love.

At first I didn't have any idea what the project is going to be. But fortunately, I found myself so

lucky to have participated to this project "Let's Make a Peace Bridge 2017". It helped me to develop many sides of my personality like to be more open minded, accepting the diversities of the other people and to respect the others' opinions. This project has sowed seeds of hope in my mind. I hope to be able to spread in my turn peace messages, trying to become a peace builder. My hope in the future is to have a world where people accept each other no matter what their religion, color, or ethnicity is, and where all of us look at each other as humans. Because I think if we also see each other as humans, we wouldn't be killing each other and we would cherish and love one another no matter what.



みんな仲良く素敵な笑顔
Wonderful smile of the participants

植田 陽香 Haruka UEDA

●日本 24歳 大学生
●Japanese 24 years old University Student

このプロジェクトには2014年に参加し、この度はリーダーとして2度目の参加だった。前回は岩手県大槌町、今回は広島と長野、と滞在地も活動も異なっていた。加えて、参加者も異なっていたため、自分の持った感想も、前回とは全く異なった。プロジェクトについて、特に印象に残ったことを2点述べたいと思う。

1. 文化の違い

10か月間パレスチナに留学した際、アラブやパレスチナの文化については学んだつもりでいたが、そ

れでも2週間の共同生活を通して、たくさんの新たな発見をした。時に衝突もし、「異文化を理解し、受け入れる」とは言葉で言うほど簡単ではないと痛感した。自分としては当たり前のことだと思っていたことも、イスラエル、パレスチナからの参加者にとっては時に理解できず、日本文化の押しつけに感じることもあったのだと思う。



どこで、どのように折衝するのが難しいが、共同生活を送るうえで大切なことは、誰かが全部譲ったり、誰かが全部押し通したりするのではなく、お互いが納得できる方法を探すことだと感じた。

2. 人間として接すること

ワークショップの最初から、国籍や人種でなく、相手と同じ「人間」として接することが重要だと、イスラエル、パレスチナの若者は話していた。私は最初、これも言うのは簡単だが行うのは難しいし、綺麗ごとのように感じていた。しかし、プロジェクトが進むにつれて、ここには、その難しいことを実際に実行できる若者が集まっているのだと気づいた。誰かが落ち込ん

だり、泣いたりしている時には、そばに必ず誰かがいて、一生懸命励ましたり、助けようとしていた。ある時、イスラエル人の参加者が泣き出し、その後それに気づいたパレスチナの参加者たちが本当に懸命に言葉の限り励ましていたのを見たとき、とても感銘を受けた。国籍も人種も関係なく、相手が「敵国」出身であることなんて全く関係なく、「人間対人間」の関係が築けていることを自分の目で確認できた瞬間だった。

このプロジェクトは終了するが、これからも互いに友人として交流を続け、イスラエル・パレスチナにおいて平和を実現するためにできることを積み重ねていきたい。



松本 美樹 Miki MATSUMOTO

●日本 23歳 大学生
●Japanese 23 years old University Student

このプロジェクトへの参加は今回で2回目である。前回は4年前、知識も経験もなく、イスラエルとパレスチナの紛争について本を読んでも現実味を感じなかった。また英語力も乏しかったので、みんなの話を一生懸命に聞くことだけに集中していた記憶がある。

しかし、当時国から参加した同世代の人たちの話にとってもショックを受けたり、新しいことを知ることができたり、学ぶことは多かった。

それ以来、イスラエルやパレスチナを訪れたり、アウシュビッツ強制収容所に見学に行ったり、軍事産業に携わっている人の話を聞いたりして、4年前よりも少しは知識や情報量、経験も増したので、紛争当時国から来ている同世代の人の話を聞きたいと思って、もう一度参加することにした。

だから今回は彼らがシェアしてくれた話についてより深く理解できたと思った。しかし、どんなに話の理解はできても、彼らの本当の気持ちまで理解できないことに次第に気づいた。その時はショックで動揺したが、同時に当事者ではないからこそできることもあるのではないかと思った。それはどちらにも加担

せず話を聞くことだ。中立でいることは時に難しいが、それができることは第三者だということを学んだ。

今回のプロジェクトでは、とてもタフな時間が多かった。私は「自由」が代名詞のようなオランダに住んでいたことがあるので、ある程度の多様性を受け入れることは容易いことだろうと考えていた。しかし、このプロジェクトでは「理解はできた、でも納得できない!」ということが多々あり、とても苦しんだ。オランダのような西洋文化でもなく、日本文化でもない、中東文化の特徴を学ぶこともできた。それは私にとってはとても貴重なことだった。

とはいえ、まったく異なる文化を理解し、受け入れることは決して容易いことではなかった。しかし将来外国でビジネスをする際、相手の文化を理解できなければ、良いパートナーシップを築けない。だから、自分の中に完全には受け入れることはできないにしても、多様性に柔軟になりたいと思う。

2週間のこのプロジェクトを通して、確かにイスラエル人もパレスチナ人も日本人も固い絆で結ばれた友情を築いた。国家レベルで見ると、この絆はとても小さいものにちがいないが、私たちにとってはとても貴重なものだ。シェアリングでも話したとおり、私たちがいくらここで小さな信頼を積み重ねて友情を大切に築く努力をしたとしても、軍事産業で大金を儲けよ

うとする人たちがいることは事実である。しかし、だからと言って、絶対にそれに動揺してはならないと思う。互いの絆や友情を大切に、希望を持ち続けることは大事なことからである。

4 years ago, I participated in this project and learned many things through listening to the stories of participants from Israel and Palestine. I was greatly touched by their stories. This experience prompted me to visit Israel, Palestine and Auschwitz, or to talk with persons who are involved in munitions industry. These experiences helped me to get more knowledge and information, and pushed me to participate in this project again. I wanted to talk with Israeli and Palestinian people of the same generation as me, and wanted to hear about their situation about what I couldn't feel reality 4 years ago.

This time, actually, my experiences helped me to understand their stories more easily. However, no matter how much I understood their stories, I found that I can't comprehend their real thought regarding the conflict. This finding made me upset.

高田 結生 Yui TAKATA

●日本 20歳 大学生
●Japanese 20 years old University Student

今回の夏のプロジェクトに参加したことをきっかけに、私はイスラエル・パレスチナ紛争について深く考えるだけでなく、互いの文化への理解を深めることができた。このプロジェクトに参加する以前、私は3月に行われたスタディツアーを通してイスラエル・パレスチナについて、現地で友達になったイスラエル・パレスチナ人から話を聞く機会が多くあった。彼らから直接、紛争に関わる個人的な話を聞くことは私にとって初めての経験であり、また大学に入学した時から訪れたいと切望していたこの国に実際に来ることができ、それ以来前にも増してイスラエル・パレスチナに興味を持つようになった。プロジェクトを通してもっと多くのイスラエル・パレスチナ人と友だちになって紛争に対する理解を深めたいと思い、参加を決意した。

2週間のプロジェクト中に広島、長野、東京と3

But at the same time, I thought that people who are not involved in the conflict can do something because of their neutrality. And it is to listen to both sides impartially. To be neutral is difficult but I think this is our responsibility.

Once I lived in Holland who seems to represent freedom, so I thought it was easy to go along with diversity. But in this project, I suffered difficulty how to deal with culture difference. Middle Eastern culture is different from either Western or Japanese culture, and it was precious to me to have found that there are many other cultures in the world other than Japanese or Western one.

Accepting and understanding different culture was not easy at all. But if you go into business in abroad, unless you can understand local culture, you can't create good partnerships with local people. I want to be more flexible to the diversities.

We could have indeed firm friendships between Israeli, Palestinian and Japanese members through this project. They might be so tiny one in the view of national level, but they are precious for us. It is true that there are people who get profits from the war but we must not be upset. We have to keep our friendships and keep the hope for peace.



都市を巡りながら、私たちは確実に仲を深めることができた。そんな共同生活の中で紛争や彼らの国の状況について多くを知ることができ、私は当初のプロジェクト参加の目的を達成した。しかし、参加前にはあまり深く考えていなかったが、今回のプロジェクトで異文化に対する理解の大切さに気づかされた。これは私が全く想像していなかったことであり、2週間の共同生活を通してイスラエル・パレスチナと日本との文化の違いが、時々私たちの中で小さな conflict を引き起こすきっかけになった。このプロジェクトは私にとって文化の違いを理解し、また互いの文化を

尊重しながら生活することの大変さを学ぶ初めての機会であった。

イスラエル・パレスチナの紛争に対する知見を深め、理解しようと学びを深めてきたが、彼らの文化についてはこれまで知る機会があまりなく、その点で今回のプロジェクトで経験したことは、私にとって貴重な体験になった。私はイスラエル・パレスチナから紛争がなくなり、彼らが一つの土地で共存することを望んでいる。異文化に対する理解と尊重は、イスラエル・パレスチナ人が共存するためには必要不可欠であると思った。このプロジェクトで学んだことを、これから異文化を持つ人と関わる時に大切にしていきたいと思う。

The peace bridge project gave me a lot of opportunities not only to learn and think deeply about Israeli-Palestinian conflicts, but also to mutually understand our cultural differences. Before I participated the project, I have had chances to talk with Israeli and Palestinian friends about the issues through Study Tour in March. It was the very first time for me to talk with Israelis and Palestinians in person, and to listen to their personal stories relating to the conflicts. Thanks to the Study Tour, I could visit the countries that I had really wanted to visit since I entered the university and this experience made me more involved in the

issue. Then, I decided to participate the project in order to make more Israeli and Palestinian friends and get deeper understanding of Israeli-Palestinian conflicts.

Through visiting Hiroshima, Nagano and Tokyo, and spending two weeks together, participants surely got along well with each other. I could learn a lot about the conflict from them, so I achieved my primary objective during the project. To tell the truth, I didn't care so much about the diversity of the cultures before the project, but I was made to realize the importance to understand difference between the cultures. This difference between Israeli- Palestinian culture and Japanese one sometimes became a trigger for conflicts among us. The project gave me a first experience to realize the importance of respecting different cultures and also hardness of community life.

I have been studying Israeli-Palestinian conflicts to get deeper knowledge and understanding about them, but I did not have so many chances to understand their culture itself. In this regard, the project gave me very precious experience in my life. I hope that the conflicts are settled and Israelis and Palestinians coexist in the same land. I learned that understanding and respecting different cultures is necessary for coexistence. I would like to keep what I learned from the project in my mind and make use of it when I meet with new people who have different cultures.



原田 直美 Naomi HARADA

●日本 22歳 大学生
●Japanese 22 years old University Student

プロジェクトに参加する前は、イスラエル・パレスチナの紛争について様々な意見が聞けることを期待していた。実際に、一カ国解決案と二国家共存案についてのディスカッションは非常に興味深かった。深い話し合いができ、より良い解決策を模索することができ

た。もっとディスカッションできればな、と思ったが、貴重な時間を過ごせて良かった。

このプロジェクトを通し、異なる文化に暮らす人々と共存することの難しさを学んだ。文化の違いから、参加者の態度が気になる場面も何度かあった。例えば、長野での文化交流イベントでは、地元の方々が演奏している間に何名かの参加者がおしゃべりをしていった。そのときちゃんと、日本人にとってそれは無礼な行為であると注意しておけば良かったと後悔している。反対に私自身も、時間通りに行動することが苦手であるという相手の時間感覚をもう少し考慮し寛容になるべきだったと思う。これらのことから、プロジェクトは自分の中で妥協点を見つけることの大切さを教

えてくれたと感じた。

私は将来的には中東地域で国際協力を携わりたいと考えている。かなりざっくりしているが、このプロジェクトで得た経験や知識、人脈は将来私のキャリア形成において役に立つものであると感じる。

プロジェクトに参加してみて、2週間という期間は「平和とは何か」を理解するには短か過ぎたと感じる。しかし、参加者の話から、紛争下で彼らが何を考え、何に苦しんでいるのかを知ることが出来た。こういったプロジェクトが持つ力はイスラエルとパレスチナの平和にとっては小さいかもしれないが、参加者がプロジェクトで得た考えは、より良い未来へ導いてくれるものであると信じている。

Before this project, I was looking forward to hearing many kinds of opinions about the conflict between Israel and Palestine. Actually, discussing especially about one-state-solution or two-state-solution was interesting for me. It was also deep discussion because we could try to find as good solution as possible. To be honest, I would have wanted to ask much more questions and do more discussions with them. It was not enough, but precious time for me.

This project taught me how difficult it was to

co-exist with people from different cultures. I was not satisfied sometimes with the attitude of the participants from Israel and Palestine because of different cultures. At the cultural exchange event, for example, some of them were chatting while the other groups were performing. I felt it was rude for Japanese, so I should have cautioned them to avoid it. On the other hand, I think about myself that I should have understood their weakness not be able to be punctual and that I had to be more tolerant to their sense of time. Then, for me this project gave me a good chance to know how important it is to accept the diversity of other people's mentalities and to find a compromise in my own mind.

I am planning to build my career on the field of the international cooperation in the future, especially in the Middle East. The experiences, knowledge and friendship that this project has given me will help me a lot to make my career.

I felt the duration of the project, only two weeks, was too short for me to understand what the peace is. However, through stories of the participants I got to know their thoughts and sufferings under the conflict. Though this kind of project's power is so small for building peace between Israel and Palestine, I hope the concept that the participants received through the project will lead the world to the better future.

塚田 美優 Miyu TSUKADA

●日本 22歳 大学生
●Japanese 22 years old University Student

「平和の架け橋 in ヒロシマ」に参加するにあたり、私はある目標を立てた。イスラエル、パレスチナ人と友だちになることだ。これを達成するために、二つのことを心がけようと決心していた。

一つ目の決心は、日常の何気ない会話を通しコミュニケーションをとることであった。初対面の人と関係を築くには、まず自分から歩み寄らなければいけない。自分の周りに壁を作るのではなく、自分の壁を壊し、自分自身をさらけ出すことから、人とつながることができるのだ。「今日は何食べた?」「今日のワークショップはどうだった?」まったく平凡な日常の会話であるが、人と深い関係を築くためにとて

も重要だと分かっていた。プロジェクトの間、誰とでも心を開いて話したら、みんなに「私はあなたともっと知り合いたい」という私の意志を示すことができただろう。

二つ目の決心は、彼らの一人ひとりの意見に耳を傾けることであった。「私はあなたの意見をしっかりと聞いています」という姿勢を示すことで、彼らは安心して、そしてオープンマインドに話すことができると思っていたからである。



ところが実を言えば、当初、私は自分から一歩を踏み出すことがあまりできなかった。プロジェクトが始まってから、私はどのようにイスラエル人、パレスチナ人と友だちになればよいのか分からず、自分から話しかけることに積極的になれなかった。だが、ある日本人参加者が「自分がまず一歩踏み出さないと、相手は何も反応してくれないよ!」という言葉に私に投げかけてくれた。私はその言葉に後押しされ、そこから小さなことでもいいから、まずは自分から何か話しかけてみようという気持ちになった。

その結果、私はイスラエル人、パレスチナ人と友だちになることができたと思う。平和の架け橋を築くには、まずはお互いが友だちになり、尊重し合うことから始まることを体験した。このコミュニティの中だけでも、このプロジェクトの目的である平和の架け橋を作ることができた私は信じている。

この体験を通し、私は自分自身を成長させることができた。なぜなら、どんなに小さな一歩でも、まずは一歩を踏み出すことの大切さを学んだからだ。そして消極的な自分から、積極的に何か行動を起こす自分に変わったと思う。

またこの活動をとおり、イスラエル・パレスチナ問題に対する理解を深め、当事者から見た紛争の苦しみを知ることができた。それは普段大学で学ぶイスラエル・パレスチナ問題とは違うものであった。

私は将来、紛争解決分野、もしくは平和構築分野で働きたい。このプロジェクト参加者の、特に日本人メンバーの考え方や将来の夢は私を励ましてくれた。彼らの素晴らしい志を聞き、いつか世界中の人たちが平和な世界で暮らせる日が来るかもしれないと希望を持つことができた。

平和な世界の実現のためには長い時間が必要かもしれない。しかし、私は希望を捨てない。絶対に平和な世界を実現させたい。そのために、自分ができることを一歩一歩やっていく。また、私の友だち、家族、周りにいる人々を傷つけることはしたくない。私の周りから平和を作っていく努力。それはきっと平和な世界の実現に繋がっていくと信じている。

Before joining this project "Peace Bridge", I set a goal to myself. It is to make friends with both Israeli and Palestinians. In order to achieve this goal, I tried two things.

First one is to communicate with them through small talks in our everyday life. Because, in order to make relationship with persons whom I meet for the first time we need to take action by ourselves, even a small one. We must be always as we are, sincere and open-minded. This is the starting point to connect with people. Therefore, I tried to communicate with them by small conversation such as "What did you eat?" or "How was the workshop today?" etc. I knew that these casual conversations had a significant power to get better to know each other. Therefore, I could show by my attitude my desire to become friends with them.

The second thing I tried is to listen sincerely to each of Israeli and Palestinian opinions. I was sure that my attitude of sincerity and respect could put their mind at ease.

However, to tell the truth, I must recognize that at the beginning of the project, I have not been so good at taking action by myself. I was struggling to make relationship with Israelis and Palestinians. I was not active to communicate with them from my side. But one day, a Japanese member told me that if I do not take action by myself they do not react and show interest to me. This advice encouraged me to talk to them from myself.

As a result, I could become friend with both Israelis and Palestinians. I have learned that in order to build a peace bridge, first of all, we need to become friends and then respect each other. I believe that we could build a bridge of peace in this community.

Moreover, through this project I could understand better the issues about Israel and Palestine.

In the future, I would like to work in the field of conflict resolution and peace building. Through this project a lot of things motivated me to dream come true. I feel that people in this world can live in the peace if they continue to take some action.

To realize the peaceful world we might need very long time. However, I do not want to give up. I want to realize the peace in this world. Therefore, I will take action that is possible for me step by step. Moreover, I do not want to hurt my family, friends and the people surrounding me. I want to make peace from my surrounding. I believe that the peace of the world will not realize without these small efforts.

谷田 怜海 Remi TANIDA

●日本 19歳 大学生
●Japanese 19 years old University Student

もともと私は紛争解決に関わる仕事に興味を持っていた。しかし具体的に何をやりたいのかがまだ分かっておらず、自分の将来像を持つことができずにいた。そのような私に、このプロジェクトは文化の違いを理解することの難しさを教えてくれた。紛争解決において、異文化理解は基本であり、また最も重要であるポイントであることは以前から認識していた。しかしイスラエル、パレスチナから来た9人と約2週間、生活を共にする中で、自分の異文化理解に対する能力のなさを実感した。

私たち日本人とイスラエル人、パレスチナ人で最も違いを感じたのは問題が起こった時の対処方法だった。私たち日本人は彼らにその問題について話してもらい、議論を交わすことで解決策を見出そうとしたのに対して、彼らはとりあえず距離を置き、少しの間その問題について私たちと一切話さないという形をとった。何も言ってもらえなければ、この問題を乗り越えることはできないと私は思っていたので、彼らの態度に対してフラストレーションをためていた。しかし、後に誤解を解くために話す場を設けると、彼らの週間として、問題が起こったら当時者同士がまず距離を置き、自分の中で整理がつくまで話さないようにしているということがわかった。そのほかにも、彼らの文化についてどの点を私たちが理解し、どの点で私が理解しきれいでいなかったのか、また彼らは私たちの文化について何を知らなかったのかが見えてきた。

このように、正直に思いを伝え、また相手からの本音に耳を傾ける過程を経て、私は自分の利己的考えに気づき、また悲しく思った。私は、自分が相手の文化を理解しきれいでいないということを差し置いて、相手が私の文化を理解してほしいということに重きをおいて考えていたのだった。紛争解決に携わるには中立な立場から物事を捉えるという能力が必要であるということを理解していたつもりだった。しかし、自分のエゴからそこに十分な配慮ができていなかった。

また今回のプロジェクトでは彼らと私たちの文化の差異を埋めるために折り合いをつけるということ

があまりうまくできていなかった。どちらかというと、一方が相手の文化を、合わない点も含め受け入れ、我慢するということが多かったように思う。相手の文化を知っていくにあたって、今後はお互いがお互いに妥協する点、しない点を討議し、満足できるところを探し出せるように働きかけていきたいと思った。

I have been interested in jobs related to conflict resolutions. However, since I have not understood what exactly the job would be or what I can do for conflict resolutions around the world precisely yet, I could not have planned my future. Through this project, I found conflict resolution more difficult to achieve than I expected by experiencing the obstacles of understanding of various cultures. It is most necessary and basic to understand other people's cultures in conflict resolutions; with my poor knowledge, I have recognized that fact. Yet, living together with nine people from Israel and Palestine for two weeks made me realize the lack of my ability of understanding of other cultures.

The toughest time during the communal life for me is a disagreement between Israeli, Palestinians and Japanese of how to deal with problems. At this moment, I felt a big cultural difference. On one hand, we Japanese tend to like talking and discussing the problem in order to try to find some solutions; on the other hand, they are inclined to be in distance and get time and space to consider by themselves without any discussions. In my opinion, without talking about the problem, we would never be able to overcome the problem, so before acknowledging their cultures I was frustrated with their behavior of being quiet. Later, we had time to exchange views against the problem for removing everyone's misunderstanding of each other's culture. We could finally understand the culture that Israeli and Palestinians tend to start talking all the facts and their feelings related to the fact until they finish organizing everything in them. In



addition to this point, there were many cultural differences or other points that both of us could not fully understand.

This discussion time also made me realize my selfish thinking. When everyone at the table telling his or her honest feeling and listening to other people's opinions, I started thinking why they were not able to acknowledge my culture or my feeling of sadness. I could hardly consider others and accept their cultures as what they were at the moment. The ability to think calmly with a neutral position is necessary to get involved in conflict resolution; however, the ability barely belonged to

me because my brain was almost occupied with egoism.

The regret through this project lays in the hard way to find a reconciliation in order to overcome our different cultures. From my point of view, one side tended to compromise the differences of cultures and sometimes pushed them to bare those distinctions. If possible, we should have shared compromises in a fair way so that all of us could be easily satisfied with their communal life. Therefore, my next step will be to work on finding the fairness of compromise on understanding other cultures.



被爆樹木の前にて
Visiting some A-bombed trees, Hiroshima.

ヤクーブ・ガザウイ Ya'coub GHAZZAWI

- 28歳 イスラエル・パレスチナグループの責任者・現地スタッフ
- Staff and Responsible of Israeli and Palestinian Group

今年プロジェクトは、私が今まで参加者として、あるいはイスラエル・パレスチナの青年グループの責任者として関わったものの中でも、最も“チャレンジング”（困難だけれどやりがいのある）であると同時に興味深いものだった。

対話を目的としたこのプロジェクト、学生たちは2週間の共同生活をとおして、本当の意味での対話や議論とは何かを経験から学んだ。実際に彼ら自身「紛争」を味わった。実は、ある参加者にとっては互いの文化的社会的背景の違いを理解し受け入れ合うのが難しく、対話や妥協の姿勢が少し足りなかったもので、彼らの間に何か気まずい空気が生まれたのである。しかし彼らは話し合いによって少しずつ解決し、友情の絆で結ばれることができた。

このプロジェクトは、相互の尊敬や平和実現の意志があれば、互いの相異を克服し、妥協の道を見出すことができるという、紛争解決の生きた体験である。

私にとってこれは、たとえ困難はあっても成功したプロジェクトの一つであった。私たちはみんな、ほんとうにすばらしい貴重な体験をしたからである。

最後に一言。私は、このプロジェクトがこれからも継続されて、若者たちを平和の働き人として育み続けることを心から望んでいる。彼らが後にそれぞれの国に貢献し、すべての人のために相互理解と和解の良い模範となるためである。

追記：私はプロジェクト後、日本の三つの教会でパイプオルガン・コンサートをさせていただき、心から感謝している。このコンサートを通じて、NPO 法人「聖地のこどもを支える会」とその活動について日本の皆様にもっと知っていただくことができた。この法人は長年、聖地の平和のために、イスラエル人、パレスチナ人、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒の区別なく、みんな同じ人間として児童や学生を支援し続

けている。私は、この度の皆様の温かいおもてなしと NPO への寛大なご支援に望外の喜びと驚きを感じた。

私はさらに多くの方々がこの NPO の支援者となって下さることを望んでいる。いつも言われるように、「良い教育は平和へとつながり、戦争は無知から生まれる」からである。

The Project of this year was one of the most challenging and at the same time interesting one that I have ever participated as a participant or as a responsible of the Palestinian Israeli participants.

Because this is a dialogue project, actually the students have learned by experience in a daily communal life of 2 weeks how to dialogue and how to discuss. They have lived the conflict between themselves. It was difficult to understand each other's' different backgrounds and cultures, so it resulted a kind of a conflicts between some of the participants, between with the dialogue and compromising especially from the Japanese side. But they could resolve this problem by dialogue and mutual acceptance. And they have become very good friends.

The project was a living experience of the conflict that taught us how to overcome our differences and to find a compromise each other through the mutual respect and the will of peace.

For me it was a very difficult but successful project because we could have these beautiful and precious experiences.

I would like to say as a last word: I really hope that this project will continue. Because it can bring up the youngsters as peace builders so that they could help their countries and become a good example of mutual understanding and reconciliation for all the



others.

P.S. Moreover I had the opportunity to perform concerts in three churches to widen the vision of the Japanese about the NPO and its activities to support the students and the peace understanding in the Holy Land for Israel and Palestinian, Christians,

Muslims or Jews the same, as we are all human being after all. I was surprised in a very good way of the hospitality of the people and of their generosity in supporting and donating for the NPO.

I hope many other people would also be part in this NPO. Because as I always say, good education leads to peace, war is made by ignorance.



福島 貴和 Takakazu FUKUSHIMA

- 信州善光寺玄證院住職、認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会理事
- Buddhist chief priest of Shinshu Zenkō-ji, Genshō-in
- Director of NPO Helping Children in the Holy Land

平和を感じられる人

今年の「平和の架け橋プロジェクト」では久しぶりに広島が活動地の一つとして選ばれた。そして8月6日、イスラエル・パレスチナ・日本の若者たち、プロジェクト参加者と共に、

平和記念式典に参加することができた。

式典の説明には、「原爆死没者の霊を慰め、世界の恒久平和を祈念するため、平和記念公園の原爆死没者慰霊碑前において、遺族をはじめ、多数の市民の参加のもとに挙行される」とある。この式典に参加して感じたことは、広島市長や広島県知事の式辞にも示されていた通り、原爆被災地の平和に対する思いの大きさである。ところがである。日本の総理大臣の式辞は何とも情けなかった。

それもそのはずで、日本は3月、国連の核兵器禁止条約制定に向けての会議に不参加を表明していたのだ。この条約はその後、122カ国の賛成多数で採択された。それは国際 NGO 核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN) の活動の大きな成果であった。そして10月6日、ICAN が今年のノーベル平和賞に選ばれたのである。国連総会が核軍縮と核兵器のない世界の重要性を訴えて71年も経つが、最近 ICAN がこの核廃絶の気運を復活させたことが受賞理由である。この受賞には、被爆者たちの熱意や活動が大きく貢献したという。我々は幸い、広島で被爆者の方々のお話に耳を傾けることができた。本当に「平和を感

じられる人」は、実際に戦争を体験した人なのだと思う。

「平和を感じられる」ことに関して最近象徴的なことが起こった。沖縄戦の際に住民83人が集団自決に追い込まれた沖縄県読谷村(よみたんそん)の洞窟「チビチリガマ」が荒らされたのだ。チビチリガマへの入壕は、犠牲者の墓でもあることから、遺族会の意志により禁止されていたという。戦争を知る沖縄の人たちにとっては、聖地であり、平和の象徴だと思う。器物損壊の疑いで逮捕された県内の少年4人の多くがガマの歴史を「知らなかった」と言い、看板などを壊したのは「悪ふざけだった」とも供述した。この事件は、歴史を知らない人にとって、平和を感じる事の難しさを示している。

我々は、世界が平和であることを願い、まず、紛争をしている聖地が平和になることを願う。イスラエルとパレスチナの人たち、特に『平和の架け橋プロジェクト』に共鳴した若者たちは、今、正に紛争をしている当時者なのだから、最も「平和を感じられる人」であってほしい。そして、被爆者のように、自分たちの体験している紛争の悲惨さと平和の大切さを、長野の人々に熱く語ってほしいと願っている。それが、長野において『平和の架け橋プロジェクト』を受け入れる、唯一の理由だからである。

Person who can feel peace

Hiroshima was chosen this year as one of the places to hold the "Peace Bridge Project". We could

participate to the Peace Memorial Ceremony with the youngsters from Israel, Palestine and Japan on August 6th.

In the explanation of the ceremony, it is said: "Being a memorial service for the atomic bomb victims and a prayer for lasting world peace, the ceremony is held with bereaved families and a large number of citizens in front of the memorial monument for atomic bomb victims in the Peace Memorial Park". I felt how eager and deep the people's wish for peace in the speeches of the mayor of Hiroshima and of the governor of Hiroshima. However, I was so much disappointed with the speech of Japanese Prime Minister.

It was not surprising because Japan has expressed non-participation in a meeting in March for establishing Nuclear Weapon Abolition Treaty held by the United Nations. Afterward it was adopted by a large number of 122 countries. It was a big achievement of International Campaign to Abolish Nuclear Weapons (ICAN). On October 6th, ICAN was chosen as the Nobel Peace Prize. It has been 71 years passed since the General Assembly of the United Nations appealed to the world for the nuclear disarmament. One of the reasons that ICAN received the Nobel prize was that this organization had worked so much to revive this expectation of the abolition of nuclear weapons. They say that the enthusiasm and the activities of the atomic bomb victims have greatly contributed for this prize.

Fortunately we had opportunity to listen to their

story in Hiroshima. I think that "a person who can feel or appreciate peace" would be a person who had experienced a war himself.

Regarding to "a person who can feel peace", a symbolic incident recently occurred. A cave called "Chibi-Chiligama" in Yomitan-son in Okinawa was damaged by someone. It is a sacred place and a symbol of peace for the Okinawa people who lived the war. Because in this cave 83 citizens had carried out group self-determination in the battle of Okinawa. That is why the group of bereaved families prohibited to get into cave. Four boys were arrested. They excused themselves saying that they didn't know the history of Chibi-Chiligama and that it was just "a joke" that they damaged the cave. This incident shows how is difficult to "feel" or "appreciate" peace for the people who don't know the history.

We wish the peace of the world be realized. And first of all, we hope that the Holy Land that is actually in conflict will be peaceful. We want Israeli and Palestine people, especially the youths who participated to the "Peace Bridge Project" to be "a person who can feel peace", because they are themselves the persons concerned. We want them to talk with their heart to the people of Nagano about the tragedy and sufferings of conflict and the hope of peace, like the atomic bomb victims are doing. This is the only reason and purpose we accept and welcome the "Peace Bridge Project" in Nagano.

浅野 耕二 Koji ASANO

- 認定 NPO 法人 聖地のこどもを支える会 スタッフ
- Staff of NPO Helping Children in the Holy Land

今年のプロジェクトは、私にとって4回目の参加である。これまで参加したプロジェクトとの大きな違いは、3拠点で活動することと、活動場所のひとつとして広島を選んだことである。

今年のプロジェクトを通して、考えさせられたことが2つある。“ヒロシマ”のことと、文化の多様性のことである。

1) 広島について：今年プロジェクトの目的を達成するにあたり、原爆の被害から復興し、平和を象徴する都市である広島で活動した。また、平和記念式典に出席できるよう日程も調整した。本プロジェク

トを企画したスタッフの立場からして、広島から平和について多くを学んで欲しかった。しかし、イスラエル・パレスチナ人の参加者の声やレポートからは、広島についてはあまり印象的に映っていないように感じられた。また、残念ながら日本人である私自身にとっても思っていた以上の印象は残らなかった。小学生だった頃のほうが、はるかに印象的であったことを



覚えている。印象に残らなかったのは、慣れてしまっていることと、遠い過去のことのでひとつの歴史として認識したからかもしれない。だが、広島は原爆が投下された初めての都市であり、平和のために伝えていくべきことである。このことは、今後の私の考えるべき課題として残った。

2) 文化の多様性について：この点は今回の参加者の多くがレポートでも記載しているとおり、過去のプロジェクトの中で一番強く感じた。文化の違い、物事の考え方の違いで参加者のフラストレーションが溜まることが多いように感じた。また、そのため予定していたことができなかったことも幾度かあった。プロジェクト中は、活動の進行を管理するスタッフの立場として、特にイスラエル・パレスチナ参加者に日本の文化、考え方を尊重して欲しいと感じた。しかし、プロジェクトを終えた今、参加者また私自身にとっても、文化の違いや互いの尊敬と理解を学べたとても良い機会だったと感じている。

今回のプロジェクトで反省すべき点もあった。平和の担い手を育成するために、今後のプロジェクトに活かせることが出来るよう、改善していくことを心がける。

ご報告を終えるに当たり、3か国の参加者をはじめ、支援者の皆様、協力・応援して下さいました多くの皆様に感謝申し上げます。

It was the fourth time for me to take part in this project. There were two differences between this year's project and the previous ones. The first one is that we went to Hiroshima, and the next one is that we went to three different places, Hiroshima, Nagano, and Tokyo.

Through this project, I had two topics to think. They are about "Hiroshima" and "the difference of culture".

First, it's about Hiroshima. In order to achieve the goal of this project, we decided to go to Hiroshima where the A-bomb had been dropped for the first time in the world. We arranged the schedule to attend the Hiroshima Peace Memorial Ceremony. We wanted the participants to learn about peace from Hiroshima. However, I thought (seemed to me) that the youngsters were not impressed by "Hiroshima" so much. To be honest, I also was not impressed at that time, but "Hiroshima" had a big impact on me when I was a child. This might be because I am familiar with it and because I see it as a just history. Nevertheless, we should hand down it to posterity for peace. It remained as my issues to consider in the future.

Next, it's about the difference of culture. I feel it the most than ever before. In this project, some participants got frustrated because of the difference of culture and thought. Moreover, our activities didn't go as planned sometimes. As a staff that manage the activities, I wanted Israeli and Palestine participants to adopt Japanese culture. However, I thought that it was a very good opportunity for participants and me to learn about it after project.

That's all I have to say about Hiroshima and the difference of culture. In this project, there were points to improve. I try to make projects in the future better.

As I end this report, I would like to thank each of you, participants and supporters, with all my heart, for your cooperation.



長野交流会でソーラン節を披露
Performance of "Soran-bushi" dance at the Cultural Exchange Event in Nagano. Well done!!

澤村 雅史 Masashi SAWAMURA

● 広島女学院大学 チャプレン
● Chaplain of Hiroshima Jogakuin University

このたび、「平和の架け橋プロジェクト」の皆様を本学にお迎えできましたこと、心から光栄かつ感謝に存じます。きっかけは、ある日曜日の夕方、一仕事終えてバスを待っていた時のことです。広島で平和運動と国際交流を熱心に行っておられる ANT-Hiroshima の渡部朋子理事長（ともこさん）にバッタリと出会い、広島原爆の日の前後に、パイプオルガニストのヤクーブ・ガザウィさんが貴プロジェクトの皆様と来広されるので、演奏の機会や、若い世代の交流の機会を探していると伺ったのでした。お話をお聞きして、すぐに思い浮かんだのは、8/5に予定していた礼拝でした。

本学（広島女学院大学）でもちょうど、毎年広島原爆の日である8/6を中心に、いくつかの平和に関するプログラムが同時並行で行われているのですが、そのうち、私が運営に携わっているのは、2つのプログラムです。一つは宗教センター主催の「8.6 平和学習プログラム」といって、毎年6～7の大学から約30～40名の参加者があります。もう一つは、本学と関西学院大学が合同で行う夏期集中講座「ヒロシマ」で、こちらにも約30～40名の参加者があります。昨年来、これら両プログラムが合同で8/6の前日朝に礼拝のひとつときを持っているのですが、そこに貴プログラムの皆様をお迎えし、ガザウィさんに本学チャペルのオルガンを弾いていただけたら、そこに集う全員にとって、どんなに素晴らしい機会になるだろうか！と、ともこさんとのお話の後半には、私の頭はもうその想像でいっぱいになっておりました。

その後、聖地のこどもを支える会の井上弘子理事長様ともメールやお電話でやりとりさせていただき、プログラムの詳細や諸手配を進めて当日を迎えましたが、様々な国、地域、人種、立場の若者たちでいっぱいになった本学チャペルの光景は、私が想像していた以上に素晴らしいものとなりました。この礼拝は、そこにいて時間と場所を共有したすべての者に

とって、忘れられないひとときになったことと思います。私も司式の立場にありながら、胸がいっぱいになり、何度も言葉がつまりそうになりました。その最高潮は、貴プログラムの代表の3名の方からいただいたメッセージでした。パレスチナ、イスラエル、日本から、それぞれ平和を求める熱い願いを語って下さいましたが、中でもパレスチナの立場から語ってくださった方の、平穏で希望のある日常を求める切なる願いには、胸が締め付けられるようでした。

今年、被爆後72年目を迎えた広島ですが、その復興の途上には、やはり彼女のように平和への情熱を傾け、自らの心身の痛みを乗り越えて、報復よりも和解を願って、貴い命を一日一日と積み重ねてこられた先人たち、とくに被爆者の思いと祈りがあることを、改めて想う機会となりました。

このような素晴らしい機会を与えてくださった皆様、井上理事長様はじめ平和の架け橋プロジェクトの参加者およびスタッフの皆様、ともこさんと ANT-Hiroshima の皆様に、心から感謝したいと思います。

First thing to say is our deepest gratitude to the participants and the staffs of the Peace Bridge Project 2017 for visiting our Hiroshima Jogakuin University to share a graceful moment of peace memorial service on Aug. 5th, 2017.

Some time ago, on a certain Sunday evening, I happened to meet Tomoko san (Ms. Tomoko Watanabe, the chief director of NPO ANT-Hiroshima, which is indispensable for the peace action in Hiroshima). I clearly remember that she told me about Mr. Yacoub Ghazzawi and the Peace Bridge



このたび、「平和の架け橋プロジェクト」の皆様を本学にお迎えできましたこと、心から光栄かつ感謝に存じます。きっかけは、ある日曜日の夕方、一仕事終えてバスを待っていた時のことです。広島で平和運動と国際交流を熱心に行っておられる ANT-Hiroshima の渡部朋子理事長（ともこさん）にバッタリと出会い、広島原爆の日の前後に、パイプオルガニストのヤクブ・ガザウィさんが貴プロジェクトの皆様と来広されるので、演奏の機会や、若い世代の交流の機会を探していると伺ったのでした。お話をお聞きして、すぐに思い浮かんだのは、8/5に予定していた礼拝でした。

本学（広島女学院大学）でもちょうど、毎年広島原爆の日である8/6を中心に、いくつかの平和に関するプログラムが同時並行で行われているのですが、そのうち、私が運営に携わっているのは、2つのプログラムです。一つは宗教センター主催の「8.6 平和学習プログラム」といって、毎年6～7の大学から約30～40名の参加者があります。もう一つは、本学と関西学院大学が合同で行う夏期集中講座「ヒロシマ」で、こちらにも約30～40名の参加者があります。昨年来、これら両プログラムが合同で8/6の前日朝に礼拝のひとつときを持っているのですが、そこに貴プログラムの皆様をお迎えし、ガザウィさんに本学チャペルのオルガンを弾いていただけたら、そこに集う全員にとって、どんなに素晴らしい機会になるだろうか!と、ともこさんとのお話の後半には、私の頭はもうその想像でいっぱいになっておりました。

その後、聖地のこどもを支える会の井上弘子理事長様ともメールやお電話でやりとりさせていただき、プログラムの詳細や諸手配を進めて当日を迎えましたが、様々な国、地域、人種、立場の若者たちでいっぱいになった本学チャペルの光景は、私が想像していた以上に素晴らしいものとなりました。この礼拝は、そこにいて時間と場所を共有したすべての者にとって、忘れられないひとときになったことと思います。私も司式の立場にありながら、胸がいっぱいになり、何度も言葉がつまりそうになりました。その最高潮は、貴プログラムの代表の3名の方からいただいたメッセージでした。パレスチナ、イスラエル、日本から、それぞれ平和を求める熱い願いを語って下さいましたが、中でもパレスチナの立場から語って

くださった方の、平穏で希望のある日常を求める切なる願いには、胸が締め付けられるようでした。

今年、被爆後72年目を迎えた広島ですが、その復興の途上には、やはり彼女のように平和への情熱を傾け、自らの心身の痛みを乗り越えて、報復よりも和解を願って、貴い命を一日一日と積み重ねてこられた先人たち、とくに被爆者の思いと祈りがあることを、改めて想う機会となりました。

このような素晴らしい機会を与えてくださった皆様、井上理事長様はじめ平和の架け橋プロジェクトの参加者およびスタッフの皆様、ともこさんと ANT-Hiroshima の皆様に、心から感謝したいと思います。

First thing to say is our deepest gratitude to the participants and the staffs of the Peace Bridge Project 2017 for visiting our Hiroshima Jogakuin University to share a graceful moment of peace memorial service on Aug. 5th, 2017.

Some time ago, on a certain Sunday evening, I happened to meet Tomoko san (Ms. Tomoko Watanabe, the chief director of NPO ANT-Hiroshima, which is indispensable for the peace action in Hiroshima). I clearly remember that she told me about Mr. Yacoub Ghazzawi and the Peace Bridge Project to plan to visit Hiroshima on and around the Atomic Bomb Memorial Day (Aug. 6th). While listening to her, I started to imagine how it should be wonderful to welcome this delegation for our peace memorial service on Aug. 5th. I was so excited to think about the scene that Mr. Ghazzawi is playing the Pipe Organ of our Chapel!

Our university also has several peace study programs around Aug. 6th and I am involved in two of those as a director. One is "8.6 Peace Study program" which has 30-40 members from several Christian Women Universities in Japan. And the other is the joint program between us and Kansei Gakuin University, which is our sister institute (though far greater than us) in Kansai Area in Japan. From last year, these programs started to joint each other to have a peace memorial service on Aug. 5th and I thought it should be the greatest opportunity to have Mr. Ghazzawi and the Peace Bridge Project there.

And it was far more than expected! I was so touched and almost lost my words to say even during leading the worship. Youths from different

background, context, culture, nation, race, religion etc. were there united in peace! I believe that it might have been an unforgettable moment for everybody there.

The climax of the service was the messages of the representatives of Peace Bridge Project. Every message was special to me though the most touching was the message of the participant from Palestine. She told her earnest desire to live daily in peace and hope.

Her message reminded me of those who worked

hard to restore Hiroshima as Peace Memorial City. At this moment, we are living in the 72nd year after A Bomb dropping but in peaceful and restored Hiroshima. We remember respectfully the people, especially Hibakusha (A Bomb Survivors) struggled in endurance to live day by day with earnestly hoping peaceful future rather than paying back.

Lastly again I really would like to appreciate Ms. Hiroko Inoue and the Peace Bridge Project, and also Tomoko san and ANT-Hiroshima.

May the Peace and Blessings unto you all.

渡部 朋子 Tomoko WATANABE

- NPO 法人 ANT-Hiroshima 理事長
- President of Non-Profit Organization ANT-Hiroshima

2005年に第1回「平和の架け橋」プロジェクトが実施された時、私は広島での受け入れを肥塚神父様とともにお手伝いした。イスラエル・パレスチナ・日本の若者たちー広島の高校生も参加したーの、熱く、エネルギーに満ちた交流であった。

あれから12年、再び今夏、「平和の架け橋」2017プロジェクトの広島訪問をお手伝いするご縁に恵まれた。8月6日はさんだタイトな日程の中、12年前とは異なる世界情勢の中で今を生きる若者たちは、どのようにヒロシマを体感するのだろうか?そんなことを思いつつ、広島女学院大学・澤村雅史先生や、NPO 法人 I pray の皆様のご協力もいただきながら、私は広島でのスケジュールを組んでいった。直接お世話をするのは、ANTの若きインターン、向地由(むこうじ・ゆい)とアナリス・ガイズバートに一任した。

8月4日～7日の短い滞在期間の中で、若者たちは目一杯、リアルな「ヒロシマ」そして「広島」を体感したに違いない。平和記念資料館見学、広島女学院大学での合同授業と礼拝、演劇『I pray』の鑑賞、原爆供養塔から世界平和記念聖堂までの平和行進、被爆者のお話の聴講、被爆樹木めぐり、灯籠流し…。情報のインプットばかりではない。女学院大学では各国代表一名ずつがスピーチをし、ANT事務所では、それぞれの思いを分かち合うシェアリングの時間も設けた。

12年前、第1回の「平和の架け橋」プロジェクト

に参加した広島の高校生の幾人かとは、今でも交流が続いている。彼らを見ていると、高校生のあの時の何にかえがたい経験が、様々に形を変えて、彼らの中に生きているのを感じる。今回も同様に、ANTの2人のインターンも含め、広島に集う世界の若者たちが、この経験を時間をかけて消化し、自分のカタチにつくりあげていってくれることを期待している。

今回私にとってスペシャルな再会があった。第1回の時に出会った、当時15歳だったヤクープ君が、12年の時を経て立派な青年リーダーとなり、素晴らしいパイプオルガニストになって、再び広島を訪れてくれたのだ。うれしい!!私は心から感動した。事を起こすよりも、事を続けることの方が難しいのを、私は知っている。このプロジェクトを支え、続けていらっしゃる皆様に、心からの敬意を表したい。

During the first Peace Bridge Project in 2005, I, along with Father Koezuka, assisted the project and welcomed the participants to Hiroshima. The young people from Israel, Palestine, and Japan (that year high school students from Hiroshima participated) were full of energy and were



passionate about learning about each other.

This summer, 12 years later, I was lucky enough to assist the Peace Bridge Project 2017. I wondered how you all, as young people living in a world quite different from that of 12 years ago, would experience Hiroshima during the busy days surrounding 6 August. I put together the program schedule with these thoughts in mind and with the cooperation of Hiroshima Jogakuin University Professor Masashi Sawamura and the NPO I Pray. I entrusted ANT's young interns Yui Mukouji and Annelise Giseburt to work with you directly during your visit.

During your short stay from 4 to 7 August, I am sure you both learned extensively about the bombing of Hiroshima and experienced Hiroshima as a living city. You visited the Peace Memorial Museum, participated in the prayer service at Hiroshima Jogakuin University, watched the play "I Pray," participated in the peace march from the Atomic Bomb Memorial Mound to the Assumption of Mary Cathedral, listened to the testimonies of hibakusha, toured hibakujumoku, and watched the lantern ceremony. You probably felt overloaded with information. However, you also

had opportunities to share your thoughts, through the peace messages given at Jogakuin University by representatives from each country, as well as during discussions at the ANT-Hiroshima office and other places.

A number of the Hiroshima high school students who participated in the Peace Bridge Project 12 years ago are still in contact with one another. Seeing them, I feel that their experiences still live inside them and have changed them in various ways. This year too, I hope the young people from around the world, including ANT's two interns, who gathered in Hiroshima take the time to process what they learn and make it their own.

This year's program contained a special reunion for me. I first met Yacoub in the first year of the program, when he was 15 years old, and in the following 12 years he has become a wonderful young man, leader, and pipe organist. I was so happy and moved that he came back to Hiroshima! I know that it is more difficult to continue something than it is to simply do something once. Everyone who supports this project and works to make it happen again and again has my deepest respect.

田仲 晶子 Akiko TANAKA

- 長野ホスト・ファミリー
- Host Family in Nagano

我が家には、パレスチナとイスラエルの男性2名がホームステイにいらっしゃいました。短時間でしたが、とても楽しく意味のある時間を過ごすことができ、嬉しく思いました。

そもそもパレスチナとイスラエルという国の位置から知らず、国の状況なども受け入れが決まって初めて勉強した次第です。その点だけでも、ホームステイに来ていただいて、私たちはその国のことを知る機会となり、有意義でした。

また、「あっちの方向の人たちはイスラム教」のような無知からくる思い込みがありました。我が家に来た二人はクリスチャンでした。

また、争いばかりがある国なのかと思っていましたが、日々戦争というわけではないことも彼らと話して分かりました。

自分は柔軟な考えを持っているのではないかと思

い込んでいましたが、異文化と交わるときに障害となる「ステレオタイプ」が沢山あることを身をもって思い知らされました。

彼らが家に来てくれたことで、私たち家族自身が自分のことを知ったり成長したりするきっかけとなりました。

- ・彼らを家に迎え入れて良かったと思うことは、
- ・互いに争っている国から来た彼らが、夜まで二人で語り合っている姿を見て嬉しく思ったこと、
- ・我が家の4人の子どもたちがパレスチナとイスラエルという国名を覚え、外国から来た人と触れ合い「外国から来た人も楽しいお兄さんである」という肯定的な考えを持ったこと、
- ・家族が自分や日本を見つめるきっかけとなったこと、
- ・などがあります。貴重な機会を与えてくださりあり

がとうございました。

パレスチナとイスラエルについて基本的なことも知らず、色々質問する私たちに、根気よく答えてくれた二人にも感謝しています。

Our family welcomed two youngsters from Palestine and Israel. It was short time, but we were happy to have a good time with them. We realized that the only thing we knew is the location of the 2 countries. So we started to learn about their situations only after we decided to accept them as host family. It was a good opportunity and positive experience for us to know these countries.

We used to be under wrong impression that “all the people from the Middle East should be Muslims”, but the two youngsters were Christians. I have thought that they were in the conflict every day, but we found it was not like that. I believed I had a flexible mind before I met them, but I found

that I also had stereotype thought which could be barriers in cultural exchanges.

Since they stayed our home, our family tried to know and develop ourselves more than before. We were happy to hospitalize them because of following reasons;

- We could see two youngsters from the 2 countries in conflict were talking a lot until midnight.

- Our 4 children memorized the name of their countries, Palestine and Israel, and got a positive impression that “they were naturally fun brothers even if they come from the different countries”

- Our family could reflect on ourselves and on our country.

Thanks for giving us the great opportunity.

We would also like to thank to two youngsters who have answered to many questions very patiently even though we did not have basic information about their countries.

塚田 和子 Kazuko TSUKADA

- 長野ホスト・ファミリー
- Host Family in Nagano

大学生の娘が、ロンドンへの留学準備の最中、「平和の架け橋 in ヒロシマ」プロジェクトに参加させていただきました。イスラエル・パレスチナ問題など、普段ニュースでしか知らない問題ですが、我が家もイスラエルの女性をホストファミリーとしておもてなしして直接ふれ合いの時を持つことができ、もっと身近に感じられるようになり、「平和とは何か?」と深く考える機会となりました。

娘はイギリスで平和構築を学びたいと、9月5日ロンドンへ出発しました。このプロジェクトで築いたつながりを今後も自分の進路に役立て、「平和の架け橋」をつくっていつてもらいたいと思います。

イスラエル人のダナとは、地元のスーパーでのショッピング、我が家の夏野菜の収穫、夕食作りを共に楽しみ、食文化交流をすることもできました。例えば、実際に鰯節を削ってそばつゆのだしを取るところから始めるなど、和食の心も少し伝えられたと思います。

夕食後は星空を見るために、姥捨(うばすて)パーキングエリアへ。満月の夜で、素晴らしい夜景でした。

生まれた国が違っても、ダナと娘と一緒に姨捨の空を見つめながら、平和な世界の実現を願わずにはいられませんでした。

ホームステイはとても短く感じましたが、11日の文化交流会に参加することができて、もう少しイスラエル・パレスチナの理解ができたように思います。

交流会の当日は、微力ながらパレスチナ料理作りのお手伝いをさせていただき、大変貴重な体験となりました。あつあつの肉料理を提供したいという料理人の思いが伝わる、美味しい料理ができあがり、舌鼓をうつことができました。

My daughter, a university student has joined “Peace Bridge Project 2017 in Hiroshima” in the midst of her preparation for one-year study abroad in London. The focus of the project is the conflict and peace between Israel and Palestine, an issue we only know through media. Our family welcomed Dana, an Israeli girl. We were glad to

have a relationship with her and to think about her country that we have never known and to have an opportunity to talk with her about the peace.

My daughter has left for London on Sep.5th to learn about peace building. I hope she will continue to develop the friendship born in this project and keep on building "Peace Bridge".

During the home-stay, we had a very good exchange of food culture with Dana by taking her to a local supermarket, picking some summer vegetables in our garden and cooking dinner together. For examples, we have made SOBATSUYU (seasoning soy sauce for Japanese noodles) that was made from dried bonito flakes shaved by ourselves. I believe we could tell her the spirit of Japanese foods. After the dinner,

we went to Obasute Parking Area because my daughter wanted to look up the stars in the sky with her. It was wonderful night with a full moon. With looking up the sky from Obatsu together, we were compelled to wish for a peace building even though our backgrounds are different.

I found that the time of home-stay was too short, but I could catch up on the communication during the exchange event on the 11th with Nogano people.

It was also a precious experience for me to support the Palestinian youngsters in their preparation of the dishes for the exchange event. I enjoyed the delicious meat dish that they carefully prepared in a way to serve it hot.



交流会でのバザーの様子
Bazaar at the Cultural Exchange Event in Nagano



JICAでの昼食の一コマ
Lunch at JICA, Tokyo

7 名簿 Lists of names

プロジェクト参加者

責任者

井上 弘子 (認定NPO法人 聖地のこどもを支える会 理事長)

イスラエル／パレスチナ責任者・同行スタッフ

ヤクーブ・ガザウイ

日本側 スタッフ

井上 弘子 (実行委員長)
福島 貴和師 (実行委員・信州善光寺玄證院住職)
田制 則子 (実行委員)
浅野 耕二 (実行委員)

青年参加者

イスラエル

イゴール・セミヨノフ (男)
ダナ・マガル (女)
バシヤ・クリチカー (女)
モラン・クナフォ (女)

パレスチナ

ジャック・ダーダル (男)
イッゼディン・ダジャニ (男)
ジョージ・タドロス (男)
ロドルフ・サアデ (男) (イスラエル国籍)
タリーヌ・ラマ (女)

日本

植田 陽香 (女)
松本 美樹 (女)
高田 結生 (女)
原田 直美 (女)
塚田 美優 (女)
谷田 怜海 (女)

Project Participants

General Representative

Hiroko INOUE
(President of NPO Helping Children in the Holy Land)

Responsibles of Israeli and Palestinian Delegation

Ya'coub GHAZZAWI

Japanese Staff

Hiroko INOUE (Director of Executive Committee)
Rev. Takakazu FUKUSHIMA
(Executive Committee /
Sinshu Zenkoji, Genshoin,
Buddhist chief priest)
Noriko TASEI (Executive Committee)
Koji ASANO (Executive Committee)

Young Participants

Israel

Igor SEMYONOV (M)
Dana MAGAL (F)
Basya KRITHCKER (F)
Moran KNAFO (F)

Palestine

Jack DAHDAL (M)
Izzeddin DAJANI (M)
George TADROS (M)
Rodolf SAADEH (M) (Israeli Nationality)
Taline LAMA (F)

Japan

Haruka UEDA (F)
Miki MATSUMOTO (F)
Yui TAKATA (F)
Naomi HARADA (F)
Miyu TSUKADA (F)
Remi TANIDA (F)

協力団体、協力者

イスラエル、パレスチナの共催団体

中東のための ヨハネパウロ II世 財団
(理事長 イブラヒム・ファルタス神父)

日本での協力団体、協力者

後援

独立行政法人 国際協力機構
在日イスラエル大使館
在日パレスチナ常駐総代表部

助成

公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団

協力

信州善光寺玄証院
カトリック広島教区 平和行事委員会
カトリック観音町教会
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima
広島女学院大学 澤村雅史先生
特定非営利活動法人 I Pray
株式会社フランストラベルセンター
長野市ボランティアセンター
幼きイエス会 (ニコラ・バレ)
カトリック吉祥寺教会
村上 光田師 (信州善光寺福生院大僧正)
鈴木 信一師 (聖パウロ修道会管区長)
比嘉 依子

講演会、チャリティー・イベント

出川 展恒 (NHK 解説委員)
出口 誠 (ジャズピアニスト)
右近 茂 (ジャズサクソフォニスト)
山口 雄三 (ジャズベーシスト)
シャディ・バシイ
(神田アルミーナ オーナーシェフ)

Collaborators

Co-organizer in Israel/Palestine

John Paul II Foundation for the Middle East (NGO)
(Fr. Ibrahim FALTAS, President)

Sponsorship in Japan

Supported by :

Japan International Cooperation Agency
Embassy of Israel in Japan
Permanent General Mission of Palestine in Japan

Subsidized by :

Mitsubishi UFJ Foundation

Cooperated by :

Shinshu- Zenkoji Gensho-in
Catholic Hiroshima Diocese
Catholic Kanonmachi Church
NPO ANT-Hiroshima
Hiroshima Jogakuin University
NPO I Pray
France Travel Center S.A
Nagano Volunteer Center
Nicolas Barré
Catholic Church of Kichijoji
Koden MURAKAMI
(Sinshu Zenkoji, Fukusho-in, Buddhist chief priest)
Shinichirou SUZUKI
(Provincial Society Saint Paul)
Yoriko HIGA

Cooperators for Seminar, Charity Events

Nobuhisa DEGAWA
(NHK News Commentator)
Makoto DEGUCHI (Pianist)
Shigeru UKON (Saxophonist)
Yuzo YAMAGUCHI (Bassist)
Shadi BASHIYI (AL MINA, Kanda)

順不同 敬称略

(In random order)

支援団体と支援者 / Donators

一般支援団体 (7団体) Organizations

カトリック行橋教会
カトリック松戸教会 コスモスの会
聖ドミニコ宣教修道女会坂出聖マルチン修道院
聖血礼拝修道女会那須修道院
東京カルメル会 女子修道院
マリアの御心会
PROJECT.etc.JP

一般支援者 (110名) Individuals

赤井 希	岡 晶子	後藤 幸	寺田 京子	松山 純子
赤崎 克俊	及川 幸子	佐々木 俊之	出川 展恒	森本 明子
天田 雄次	小山内 州一	佐川 洋子	富崎 之夫	真下 広子
東 幸江	小田 淳	阪井 恭子	戸井 利子	榊谷 紀子
伊東 止女子	小野 修	澤 美由紀	中村 ミツノ	眞下 まゆみ
伊藤 勝子	太田 あき代	塩田 光	西勝 恵子	宮川 園絵
井上 志帆子	太田 晴子	宿澤 恵子	西田 百合子	溝口 泰子
井上 静子	大西 美恵	神野 裕美	野口 紀世子	水野 叔子
井上 千賀子	大沢 珪	鈴木 幸子	野口 裕之	村上 宏一
岩下 直子	加地 貴美子	鈴木 登喜子	野村 孝弘	山下 光代
今村 宏子	加藤 喜代子	高瀬 紀子	野村 泰樹	山口 裕子
市川 黎子	鎌田 まさ子	高瀬 将章	花田 俊信	山田 康子
石川 ゆかり	金子 由佳	高島 友子	橋本 和子	山田 真理子
石川 直美	春日 圭子	高野 千草	波田 裕美	山本 貴弓
石田 知子	川西 景子	谷山 正恵	Sr 藤本 保子	柳下 宇一
石澤 雅士	君家 翔太	竹谷 純子	古屋 恵子	横沢 文子
池永 廣美	切田 トシ	田口 幾子	深津 利子	吉川 八重子
浦田 むつみ	北垣 陽子	田制 則子	深堀 柱	吉田 充志
上西 博	北原 豊子	田村 久恵	福瀬 くに子	吉田 友一
遠藤 久夫	木村 護朗	田村 奈巳	細谷 正子	吉武 尚子
遠藤 香恵子	木村 浩之	田中 美帆	本間 早苗	渡辺 恵美子
胡 美喜子	小嶋 光恵	武井 久子	本田 江身	渡邊 公伸

(敬称略)

PROJECT REPORT

イスラエルーパレスチナー日本

平和の架け橋プロジェクト in ヒロシマ 2017 報告書



原爆ドーム
Hiroshima Peace Memorial
(Atomic Bomb Dome)

編集スタッフ

井上 弘子
浅野 耕二
佐藤 克裕

Editorial Staff

Hiroko INOUE
Koji ASANO
Katsuhiro SATOH

翻訳協力

比嘉 依子

Translation Staff

Yoriko HIGA

写真提供

井上 弘子
福島 貴和
浅野 耕二
佐藤 克裕
参加者

Photographers

Hiroko INOUE
Takakazu FUKUSHIMA
Koji ASANO
Katsuhiro SATOH
Participants

平和の架け橋プロジェクト in ヒロシマ 2017 実行委員会

認定NPO法人 聖地のこどもを支える会

〒164-0003 東京都中野区東中野5-8-7-502

TEL & FAX 03-6908-6571

URL <http://seichi-no-kodomo.org>

E-mail ispalejpn@gmail.com

John Paul II Foundation for the Middle East

Hebron Jerusalem Street 475, P.O.Box 24 Bethlehem

TEL (972) 2 274 55 57

FAX (972) 2 275 24 97

URL www.jpji.ps

E-mail info@jpji.ps

発行日 2017年12月1日

写真 Cover photos

表紙: 原爆ドーム前での集合写真

裏表紙: 広島でミュージカル『I Pray』を鑑賞後に出演者たちと

Front: The participants of the "Peace Bridge Project" in front of the Hiroshima Peace Memorial (Atomic Bomb Dome)

Rear: Participants of the Project with the cast of the Musical "I Pray" after the performance



認定NPO法人
聖地のこどもを支える会



John Paul II
foundation